明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年四月十五日第三種郵便物認可
統一事務取扱所　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

「統一」　第廿三年　五月號

（第二百九十一號）

心の鏡……大僧正　本多日生
日蓮聖人教義綱要……僧正　井村日咸
デモクラシーと佛教と國體……松尾皷城
機微譚語……山根青村
法華經信者が手取り早く看取せんとした佛教の研究概要
和歌課題『山路躑躅』……子爵　清岡長言選
趣味餘滴……讀者月旦……俳句
登山僧と意義……前田日應

東宮廸宮裕仁親王殿下御成年、本月吉辰を卜して加冠の大典を擧げさせ給ふ（四月二十九日の御誕辰をもて御祭式のところ、竹田の宮の御事おはしまして期日を延させられ、改めて五月七日をもて吉日と定め給ふ）億兆内外の臣民孰れか瞻仰し欣忭せざるべき。

殿下仁慈聰明、而して英邁の御天質は　明治天皇に承け給ひ、寛宏の御美性は　今上陛下に嗣がせ給ふ。令聞夙に中外に布き、民望率土に普くましますこと良に以ある也。神國麗玉の本質この皇儲のおわしまして更に耀き彌らんことの憧こし。

夫れ吾曹は土に一王、教に一佛のみを知り而も王佛一根の因緣を信ずるものにて、之を法國冥合と稱へ來れり斯土は最勝國の大日本にして教は最尊の法華經を指す。最後世界の大平和大愉樂は斯の教と國との義理徹底する事に於ての時に訣するものなる由を確信す。この信念に住する吾曹、今最勝王國に未來の帝位を嗣き給ふ　殿下の御加冠の日を拜して勇躍歡喜に堪へず、輙ち赤誠を披瀝し謹て祝意を表し奉る。

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

「統一」（第二百九十號）（第二十三年四月卷）

本多日生師著

大藏經要義

菊版三方金縁函入洋装上製
毎冊四百頁以上既刊自一卷至十卷各冊貳圓四拾錢送料各十二錢

◎日蓮主義綱要
◎日蓮聖人正傳
本多日生師著　正價壹圓六拾錢　送料八錢

◎日蓮主義の運用
◎日蓮聖人の感激
四六版美本　正價壹圓拾錢　送料共

◎日蓮主義　九拾五錢　送料六錢
◎修養と日蓮主義　前同斷
◎國民道德と日蓮主義　前同斷
◎人と教　壹圓貳拾錢送料八錢
◎法華經の心隨　八拾錢　送料共

碧瑠璃園著

日蓮聖人

四六版九〇〇頁　ポイント型上製　新活字　一冊貳圓八拾錢　郵税拾貳錢

右取次販賣　東京小石川區白山前町一七
統一編輯所
振替東京三三五三三番

大僧正村雲日榮尼公御題字
法學博士志田鉀太郎氏序文
日蓮宗大學教授　北尾日大先生著

最新刊
通俗日蓮聖人の教義

四六版全一册　總振假名付四百餘頁　布製金文字入美本
正價金一圓五十錢　送料金八錢

内容要目
○人生と宗教○宗教の選擇○釋迦牟尼の宗教○佛教と日蓮聖人○日蓮聖人傳○日蓮聖人の人格○日蓮聖人の遺文○法華經一班○日蓮聖人の教義○卷頭日蓮上人眞跡肯像奉掲

我國思想界の最高權威たる日蓮聖人の宗教の各方面を縱横に說破して遺憾なからしめたるもの本書以外他に類無しといふべし。戰後に於ける最勝思想を修養せんと欲する國民は須らく必讀せざるべからす

小川泰堂著
日蓮大士眞實傳

菊版半截　全一册
上製クロス金文字入　正價七十錢　送料六錢

佐藤海軍中將序文
上村海軍大將題字
宇都宮主計之介口演
日蓮聖人御傳統一節

菊版美本　全一册
正價一圓二十錢　送料八錢

發行所　京都市東阪洞院三條上ル　振替大阪一三〇三六五番　平樂寺書店

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（十錢郵税五厘▼）

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

尺五絹本　旭の森開宗　王山筆

尺五絹本　身延幽棲　王山筆

心の鏡

自慶會設立以來、我本多師は延人數實に數十萬に對して講演されたることとなるが、其演途の内容は種々の方面より取材されつゝあるある中に、左は去る三月十四日、内田造船所造機工場にての講演の要記なり、亦以て工場講話の資考たらん、未だ校閲を經ず、文責記者にあり。

本多日生

▲欺されな

今日は心の鏡と云ふ事に就て御話する、心の鏡を磨けば是に因つて人間の卒業證書を渡す事が出來るのである。抑鏡と云ふものは決して欺されないものである。嬉しい心を以て鏡に向へば鏡にも嬉しさうに現はれ、悲しい心を以て鏡に向へば是れ亦悲しい姿に現はれる。どういふ風の心を以て鏡に向つても、いつも考へて居る事を鏡は其有りの儘に現はすのである。決して黒い顏をして來たものが白く寫つたり、歪んだ奴が眞直には寫らないのである。斯くの如く鏡と云ふものは決して他の物に欺されないものである。故に日本人は心を鏡の如くに持てば間違ひはないのである。心を鏡の如くに持てよと云ふ事は、解釋をすれば『欺れな』と云ふ事である、惚れて見れば痘痕も笑靨に見えると云ふ事があるが、鏡は決して痘痕を笑靨には寫さぬのである、痘痕はどこまでも痘痕にうつすのである。夫れを痘痕をも笑靨と見て大に美人だと喜んで居ると、夜が明けて見ると大痘痕でアーンと云ふ樣な事があるのである。だから諸君は鏡の如くに心を持つて、欺されぬ樣にせんければならんのである。

▲間違はない

夫れから鏡には又間違はないと云ふ事がある。非常な美くしい着物を着た美人を粗末な着物を着た容貌の惡い女と間違へてうつすと云ふ事は決してないのである。又顏に墨の附いて居ないものを墨の附いた樣にうつすと云ふ事も無いのである。尤も淺草の花屋敷に行くと顏の長くうつゝたり平つたくうつつたりして、笑はすには居られない樣な鏡があるが、あたり前の鏡には決してアヽ云ふ風に長くうつつたり平つたく寫つたりする事は無いのである、で日本人は鏡の如くに心を持つて何事も間違はないと云ふ事、間違つた風に取らないと云ふ事が肝心である。

▲大事な問題

此欺されないと云ふ事、間違はないと云ふ事が人間には大切な事で、卽ち鏡の如くにやれと云ふ事は、國と云ふ大きなものゝ上から見ても實に大切な事なのである。此世の中にはまことに種々〳〵な事があるから、其等の事を誤解をしたり、欺されたりしては否けない。私は諸君は最早此欺されない間違はないと云ふ事には、卒業をされたものとして御話し度い諸君は既に鏡の如くに清い心を持つて居られるものとして御話し度い、隨つて又私の話を聞かれるにも間違はない樣に聞いて貰はねばならんのである。そこで愈〳〵私の御話しやうとする事に移るが、こゝに非常な大問題があるのである。

▲東洋の文明の特色

大問題と云ふのは他でもないが、今日の此世界文明には東洋文明と西洋文明と二つあるが、東洋文明にも西洋文明にも孰れにも善い所もあれば悪い所もある。其委しい事は却〳〵一時には御話出來ぬが、諸君の鏡の樣なる心に東洋文明と西洋文明とを寫して見て、どちらが善いかと云ふ事が、こゝが大切の所であると思ふ、大體を申せば東洋文明の特色と云ふものは、皆が抱き合ふて行く所が東洋文明なのである、細かい所を見れば夫れは東洋文明の中にも種々變つたものが交つて居る。夫れは同じく日本人でも一

人一人として云つて見れば非常に豪いものもあれば非常に低い奴もある。非常に眼の小さい奴もあるが、大體の上から見れば孰れも日本人だと云ふ事はわかるのである。諸君の女房は決して諸君を間違へはしない、これは宅の夫ぢやない、これは宅の夫ぢやないと云ふ事は皆知つて居る決して間違へる事はない、けれども大體から云へば皆是れ日本人である。是は日本人には日本人の特色といふものがあるからで、夫れと同じく東洋文明といふものにも全體に亘つた特色がある、それは「抱き合つて行く」と云ふ事なのである。日本で考へれば、日本は國の初めより天子様から人民に至るまで抱き合つて居る。天子様は民を子の如くに抱かれ、民は又天子様を親の如くに抱いて、互に抱き合つて行つて居る一軒の家にしても家族主義と云ふて、親子夫婦互に抱き合つてゆく溫かい所が特色なのである。何事につけても一帶に亘つて調和的といふ事が東洋文明の特色なのである。論語にも天下を平らかにせんとせば先つ國を治め、國を治めんとせば其家を齊へよ、其家を齊へんとせば先づ其身を修めよ、其身を修めんとせば先づ其意を誠にせよ、其心を誠にせんとせば先づ其意を正ふせよと云ふてある。即ち東洋文明に於ては忠孝並び行はれて悖らず、親子互に大切にしあひ、夫婦互に大切にしあひ、朋友互に大切にしあひ、君臣互に大切にしあふ事が皆並び行はれるのである。如何に女房が可愛いゝからとて友達か來ても嬉と抱き合つて居ては馬鹿な奴だと笑はれる。されば云ふて友達が來ると友達とばかり面白さうに話をして女房はほうつて置くと云ふのでも否けない、友達も大切にして女房を大切にする事も忘れず、さうして會社へもよく勤めると云ふ樣に、何もかも調和的中庸を得る事が東洋文明の特色で、我々は東洋文明、東洋思想の善い所はこゝだと考へて居る。

▲西洋文明の特色

西洋の思想は片寄る風がある、個人主義が起れば猫も杓子も個人主義でなければならぬ樣に個人主義にかたまる。さうかと思へば一方に國家主義が起れば又猫も杓子も國家主義でなければならぬ樣に國家主義にかたまる、金持の味方をする。勞働者の味方をしやうといふ事になれば誰も彼も働者の味方をすると云ふ樣に兎角に一方に片寄るのが西洋文明、西洋思想の特色であると私は思ふ。其爲めに今日でも西洋は一の安定を得る事が出來ずして非常に騷いで居る。西洋文明の表面には文明の進歩と云ふ事があるから鳥渡だまされるが、よく見れば西洋は一の安定を得て居らぬ。今本を讀んで居るかと思ふと飯を食つて居る。飯を食つて居るかと思ふと雪隱へ入つて居るかと思ふと散歩をするとなると誰も彼も金持の味方をする。勞働者の味方をすると云ふ樣に兎角に一方に片寄るのが西洋文明、西洋思想の特色であると私は思ふ。其爲めに今日でも西洋は一の安定を得る事が出來ずして非常に騷いで居る。西洋文明の表面には文明の進歩と云ふ事があるから鳥渡だまされるが、よく見れば西洋は一の安定を得て居らぬ。今本を讀んで居るかと思ふと飯を食つて居るかと思ふと雪隱へ入つて居るかと思ふと散歩に出て居ると云ふ有樣で之を鳥渡見ると進歩の樣であるが、よく見ると決して進歩ではなく安定を得て居ないのである。西洋文明は政治に於ても學問に於ても經濟に於ても常に斯くの如くジタバタして居るので、世界の人間は實に大迷惑をして居ると私は云ひ度い、故に私は西洋文明は餘り感心しない。東洋文明は調和して居る此調和が宜いかドタバタが宜いか、何れが宜いかと云へば無論ドタバタは駄目な事はわかつた話である。譬へて見れば氣が落附かない十七か二十歳位の時分には、巡査にならうか、車夫にならうか、泥棒にならうかなどゝいろ〳〵に考へる。丁度そんな工合で、ジタバタするのは全く駄目である。一定した仕事に向つて進んで行く事が出來る樣になつて始めて豪い人にもなれるのである。巡査はつまらぬから納所坊主になつた、味噌摺坊主も詰らぬから泥棒になつたと云ふ樣なのでは進歩などゝは云へないのである。人間は秩序を立てゝ順序よくやつて行かぬと駄目なものである。西洋文明は丁度巡査が泥棒になつた、坊主が人殺になつたと云ふ樣に極端から極端に行くのが特色で、是では困る、是れはどうも大に考へなければならぬ思想だと思ふ。

▲各分相應の働き

我々の身體でも調和と云ふものがあるので非常に豪い働も出來るのである。頭は頭、手は手と夫々別々ではあるが、胸で何か考へると足も手も一所になつて調和して働くから豪い仕事の出來るのである。胸で是から內田造船所へ行つて働くと云ふ事を考へると、命令をかけなくても足は動き出して會社へ來て仕事場へはいるさうすると歩くだけ歩いたら今度は手の方働けと云ふ命令をかけなくても手は直ちに働いて盛んに仕事をやり出す、さうして必要に應じて手も足も一所になつても働くのである、隨分重い金屬を一人の人が持つても歩く、又一人の人が棒の挺をこぢる、又親方であらうが大きな鐵板を持つて居ると、こちらから其板へズボリ〳〵と穴をあけて行くが夫れが丁度板の眞中へゆくと云ふ樣な實に豪い仕事も是皆頭も手も足もどこもかも一所になつて働くから出來るわけで、即ち全身の調和といふものが保たれて居るから出來るのである、眼が一つ横を向いて居つても調和が破れるから仕事は出來ない、全體が調和すると云ふ此調和の働の中に、一つの不平も起すものゝない人間の身體と云ふものは、實に豪いものである。生れてから死ぬまで踏附けても諸君の踵は決して不平を云はない、餘りちやないかチトおれを顏の横チョへでも附けて呉れなどゝは決して云はない、又お尻は一生お尻で居て一度も文句を云ふて來た事がない。仕事によつては身體の一部が働き一部は遊んで居る事があるが夫れでも不平は云はない、郵便脚夫は足ばかりを使つて居り、代書人は手ばかりを使つて居るが、曾て郵便脚夫の足が不平を云ふた事も聞かねば、代書人の手が不平を云ふた事も聞かない一旦郵便脚夫になつた以上足は充分決心して三年やらうと五年やらうと決して不平を云はぬのである。夫れが一々今日も御苦勞だけれど一つ又走つて呉れと云ふ樣な事を云つて足を使はんけりやならん樣では實に困る。

▲阿れるが如きウヤ

ルソン

世の中の文明と云ふものも丁度其通りで、頭にならうと手にならうと足にならうと、一致結合して行つて始めて大きな仕事も出來るのである船を造るにしても、鐵が一旦船の裏に張られたら假令苦が附き牡蠣が着いても一旦擔任した仕事にかゝる以上不平は云はないのである、人間も自分の引受けた方面に於て何でも豪くならう、坊主になつたら傳教大師、弘法大師等の如き豪い坊主になつてやらうと云ふのが東洋の思想なのである。然るに西洋の思想はさうでない調和と云ふ樣な事などは生溫い、何でも自分自分の事だけをやらうと云ふので、譬へば石の粉末を袋に入れた樣なものである。袋が破れたらバラ〳〵になつてしまふ、是れ即ち今日の西洋の勞働問題なるものである。此頃の新聞を見ると米國の大統領は我々は大勢の人間の公僕であると五度も十度も云ふて居るが、一國の大統領ともあらうものが、俺はお前達の家來ぢやと云ふ樣な事を云つて居つて何になる、親方が子分達に向つて俺はお前の子分ぢや、監督者ぢやな

い、子分ぢや、子分でござい、子分でございと云ふ樣な事を云ふては困るではないか、頭が上にばかり居つては濟まぬから、お臀の下の方へ行かうと云ふのでは否けないぢやないか、其位なら頭をやめたら宜い、自分は米國の輿論で以て大統領になつたのであるからと云ふて、何も威張る事もないが、あゝ云ふ事を云はんでも宜さゝうなものである、あゝ云ふ事を云ふのは阿れる言葉である。牙慶事を云はなければ大統領の役が勤まらぬ樣なら罷めて了つた方が宜いと思ふ。斯くの如く今日の西洋は袋が破れて來たのであるから駄目である、鶴てバラ〳〵になつて行くに極つて居る、私は豫言して置く、乾度もう間もなく駄目になる。

▲餅の如く固る日本人

日本は糯米で搗いた餅の如きものであるから段々固まる一方である、日本人の團結力と云ふものは餅の如きものであるから、いくら毀さうと思ふても毀す事は出來ないのである、折角斯う云ふ樣になつて來た國家が、袋が破れて石の粉末がバラけて來て居る西洋の國家の眞似をする必要はどこにあるか、そこは諸君の心の鏡に寫して見なければならん所と思ふ我々國民は日本人たる以上、糯米で造つた餅の如く、數千萬人あるも皆協同して德を行はふと云ふのが日本人の特色なのである、これが善いか惡いかは諸君の心の鏡にうつされたらわかる事と思い

ふ。

▲東洋は人情で持つ

夫れから今一つは東洋文明は大體優しい人情と云ふものが土臺になつて居る。人はどうでも宜い、見て居れ貴樣は！　俺は旨い物を食ふぞと云ふ樣なのではないのである。此人情と云ふは妙な奴で、我々が旨い物でも食つて居る時に犬でも椽先に顏を出して熟乎と眺めて居るとツイ何か與る氣になるものである。與らないと氣分の惡いものである。況んや空腹い人間が五人も七人もグルリツと自分を取圍んで見て居る眞中で辨當を使つて御覽なさい、いかにも氣持の惡いものであらう、マア仕方が無いから此中のきんとんの一ツ片とか、燒豆腐の半分とかでも皆に分けてやらうと云ふ事になる、譬へばパンの半分でも君も食ひ給へと云ふのが、そこが人情である。何だい俺が働いて俺が食ふのだ構ふものかいでは人情ではない、東洋は此人情で國家を造つて居るのであつて、優しいから烏渡見ると駄目な樣であるが、そこに美しい所があるので、譬へば一家の財產でも東洋では是末の物是は女房の物と判然區別は附いて居ない、算筒の中の煙物は女房の物ではあるが夫が質に置く事もあり、時には女房の物の袢纏を着て來ると云ふ樣な事もある、一旦夫婦となつた以上、夫の物は女房の物、女房の物は夫の物ばかりの夫婦子兄弟夫婦皆調和して云ふ樣に人情で以て調和してゆく、親

お互の間は一々權利などを以て爭はず、やさしい所でやつて行くと云ふ人情を基にして來て居るのが東洋文明の一特色である。主人と家來、雇主と奉公人との間柄も亦同樣に人情を基として、奉公人は丁稚から仕上げて番頭になり、夫れから通ひ番頭になり金を分けて分家をさせ商賣をさせて夫れで仕上げると云ふのが日本の奉公人のゆき方で、其間主人の方も奉公人の方も決して互に權利とか義務とか云ふ事は云はないけれども、チヤンと義務に對する權利は主人から與へるので、是れが日本の大きな商賣人のやり來つた所の方法なのである。萬事此通りに親切を以て組立てたのが東洋文明なのである。西洋のは自分を土臺にして組立てゝ居る。

▲西洋の權利思想

西洋文明は自分を土臺にして組立てゝ居るから、互に權利を主張するから裁判ばかりがやかましくなる。それは日本でもさう云ふ事が多少は無いが、西洋では毎日毎日實にやり切れぬ程裁判事件はあるのである。日本では老人が居て、「マア俺の顏に免じて任せい」と云ふ樣な事で大抵の喧嘩は裁判沙汰にならないで濟んで了ふ、「彼奴五圓借りた儘で返さない、怪しからん奴だ」と云ふ樣な場合にも組長とか云ふ人が、「夫ぢや俺が幾干か出してやるから掛葬して遣りねえ」と云ふ樣な事で濟んで了ふ、夫れが西洋だと「構ふものか訴訟費用は被告の負擔ましくなる。

たるべし」と云ふ樣な事にドシ〳〵裁判沙汰にして了ふ、鳥渡見ると工合が宜い樣だが結局双方氣まづくなり、面白くない事になる。夫れよりもどちらかと云ふと人情を基にしてゆく事が美くしいと思ふ、是から後も我々は此美くしい人情といふものを引續き土臺にして行き度い。

▲ギリシヤ產出の文明

まだ〳〵いろ〳〵善い事があるが、東洋文明の事は此位にして置いて、西洋文明は大體どういふ事で出來て居るかと云ふ事を今少し述べやうと思ふが、西洋文明の由つて來たる所は大體四つに分ける事が出來る。第一はギリシヤと云ふ國であつて、そこが最も文明の早く開けた國であるが、そこの文明即ちギリシヤ文明の特色は學問を一生懸命にやつて、一々理窟で推して行かうと云ふので、哲學、科學と云ふものが出來て今日の文明の基を爲して居る、夫れから今一つはギリシヤ人は世の中に暮してゆくのに面白く賑やかに花やかに暮して行かうと云ふ考から、世の中を非常に花やかにする事に骨を折り金があれば、藝妓でも連れて歩かうと云ふ樣な風であつた。斯う云ふのがギリシヤ文明で、此頃の思想は凡て此ギリシヤ文明から來るのである。

▲ローマ其他と長短

次はローマ文明で、此ローマ文明は法律で以て繫がり。法律で以て國家を結ばふと云ふのが特色である。次はヘブライ文明で、此國はキリスト教がそこから起つた國であつて、人が可愛がつて行かなければならぬと云ふのが特色である。今一つはチユートン民族の文明で、是れは何でも自分が自分がと云ふ自我の考を基として居る文明である。即ちギリシヤ文明は知識を重んじ世の中を賑やかに暮すと云ふので、ローマ文明は又法律を以て國家を結ばんとし、ヘブライ文明は人を愛する事を基とし、チユートン文明は己れが己れがといふ考を基として居る孰れも一長一短あつて、譬へば喋舌るのがいくら上手だと云つても喋舌つてばかり居つては厭な奴だと云はれると同じく、默つて居るのが宜いと云ふても云ふべき事迄も云はずに默つて居ると彼奴は馬鹿だと云はれる如く、學問學問とばかり云つて屁理窟ばかり並べて居るのでは所謂論語讀の論語知らずで、屢學者に似合はない解らない事を云つたり行つたりする。是れ卽ち學問中毒で、希臘文明の流れを汲む人には此類の人が尠からずである又派手を好んで藝妓を連れて自働車に乘廻して勞働者から石を投附けられなどして、終には借金で首が廻らなくなつて執達吏に來られ、結局泥棒になつて牢屋へ入ると云ふ樣なのも同じく希臘文明の流れを汲む人に多いのである。こんな風に西洋文明はつん曲る性質を帶びて居る。何も彼もが學問萬能であるからして大きな事を出來し得ず、學者は段々澤がわからなくなり、馬鹿になつて了つたので淺ましいものである、頭から水でもブツ掛けぬと駄目な奴が今日澤山にあるのは氣の毒なものである。又成金が騷いだ時分の事なども聞くと隨分馬鹿々々しい事をやつたもので、或者は料理屋で疊を積んで火を附けて火事ごつこをして遊んで、料理屋の方で驚いて止めると「ナニこんな家の一つや二つ燒いたつて三萬か四萬もありや出來る」受けた」とばかり盛に火事ごつこをやつたといふ樣な事も聞いて居る、實に馬鹿げた事をやつたものであるが、西洋人もさういふ事をよくやる。殊に婦人に花やかな粧をさせて腕を組んで遊び廻る所などは、どうしても石を打附けなければならん所までも行くのである。又羅馬文明の流を汲むものは何でも一々法律でやらうとする。現今の法律は凡そ何條あるか、實に澤山なものであるが、アンナに澤山にあつたとて何にもならぬ、人間といふものはモツト簡單明瞭にして使ふべきものである、あの樣に澤山な法律を造つて喜んで居るのはアレは法律中毒にかゝつたもので法律の製造屋たるに過ぎない、又ヘブライ文明の特色たる耶蘇教の愛と云ふものは、宜いもので、行はれゝば結構であるが、ア、云ふ愛は却々行はれない、現に耶蘇教國たる各國が東洋民族を色の附いた人間として非常に嫌ふではないか、米國の樣な文明を誇つて居る國でも非常に色の異つた人間を嫌ふでないか、米人の爲めに虐待を受ける有色人は一年に幾人あるか知れぬのである。無論日本人も昔は西洋人を嫌つた、併し今日では日本人は西洋人に對しては排斥しないのみならず寧ろ餘りに尊敬し過ぎて居る位である、然るにキリスト教の宣教師は此頃の朝鮮の暴動にも重なる煽動者となつて日本排斥をやつて居る、彼等の斯くの如き僻見は速かに除かなければならんが、兎に角基督教の愛と云ふものは基督教の精神なりとして本統に行つて臭いゝば宜いが、斯く人種的僻見を交へて居る所の愛では到底駄目なのである。又チユートン民族の文明も、人間の腰の强いのは宜い、いつも人の世話になり、又何時までも親の脛を嚙つて居ては否けないが、何時も脛を張つて歩いては困る、彼方からも脛を張つて來れば此方からも脛を張つて行くのでは始末にをへない、獨逸の如きがそれで、其爲今度の樣な大戰にもなつた、或人はチユートン民族のあの我武者な性質はあれはもと山賊や海賊であつた其性質を持ち傳へて居るのであると云つたが、全く今度の戰爭中でも獨逸人のやる事は實に亂暴で親や夫を柱に縛り附けて置いて其見て居る前で娘や女房を辱めたといふ樣な亂暴な事を屢やつた、彼の獨逸大使の如きも一旦談判破裂して歸るや、我國では國際の禮儀を守つてチヤンと警官に護衛させて横濱迄無事に見送りまでもしたのに彼れ大使は一言も言葉も交さずして去り、然かも日本を去つて米國に着くや、上陸匆々日本の惡口を云ふたのである、

又我國に居る獨逸人には決して危害も加へず親切にしてあるのに、彼獨逸は學生其他迄も我が國人は皆拘禁して甚しきは衣類所持品迄も剝ぎ取つて了つたと云ふ有樣である。

▲危險なる哉西洋文明の眞似

這麼西洋文明がどこが宜いか、あまり日本人もだまされては否けない東洋文明の方が餘程進歩して居る所がある、彼等は餘り增長して居る然るに日本人は其淺ましい增長した西洋文明の眞似をせんとするのは、實に危險な話で、外面鳥渡宜ささうに見えても實は淺ましいものであるから、譬へば勞働問題にしても何にしても迂乎眞似しやうものなら醋い目に遇ふ事にならう

若し勞働者諸君にして希望あつて資本家に相談を持ちかけても否けなかつたら政治家宗教家等の團體の所へ問題を持ち込む事にしたら宜からう。諸君はどう思ふて居られるか利らぬが現在の日本の資本家は未ださう澤山の金力は得て居らない、現に此頃は大阪あたりの企業家などバタリ〳〵と倒れるではないか、其爲に近來大阪人の東京へ滔々と流れ込む勢は非常なものである。今日の我が工業界の現狀は一つまづけば基礎がガタ附かなけりやならんと云ふ危い狀態になつて居るのであるから、今日は資本家も勞働者も一身同體共に俱に骨を折らなければならん時であつて、徒らに西洋の眞似などをして居るべき時ではないのである。今日の日本にはまだ金持が足りないのである、モツトウシト金持があり金があれば夫れこそ西伯利亞の方へも支那の方へも南洋の方へも盛に會社を拵へる事が出來るし、さうすれば日本の職工はドン〳〵往つて働く事が在來るのであるが、まだ日本には金持が少いから困る、モツト盛に金持が出來なけりやいかぬのである。此點からも資本家と勞働者が合體して働き、共に大いに金を儲けて共に發展して行かなければならんのである。願はくは諸君は既に卒業された一人前の立派な人々だからして、つまらぬ人の云ふ事などに迷はされず、清い心の鏡にかけてだまされぬ樣、間違はぬ樣にやつて行つて欲しいものである、我々には立派な東洋文明を持つて居るからして間違つた西洋文明の眞似などせぬ樣にして欲しいものである。明治天皇の御製にも

國と云ふ國のかどみとなるばかり磨けますらを大和魂

と云ふ事が出來る樣に立派な國に我が國をする世界の國と云ふ國、皆我が日本を手本にせよが國民は決して他國の尻を追つて行く必要はないと云ふ確信を持てよと仰有つたのである、我願はくは諸君は我が日本帝國の爲めに、飽迄も我國の名譽を發揚する事を心掛けられん事を望むのである。

三行評論

■帝國の危機　を國民紙上に論じつゝあるもの之を大谷光瑞君となす。彼の取材は廣くして論徹するところは深し。眞に彼は英俊なり

■斯の如きの　俊傑を出したか出たか开は何れにしても良、兎に角本願寺より彼を逸したるは彼の宗門の教田粗質なるに基くや論なし

■佛教研究道　場を聯合にて建てよとの檄を發せる人あり曰く岡田良平、高楠順次郎、村上專精等なり、各宗各異色あり出來ぬ相談乎

■五月の天晴　會は聖德太子の御事業に就てを文學博士黑板勝美先生演ぜらる其の勸誘文に曰く日蓮聖人が法華經を中心として神儒佛

■三道統一の　大教義を主張し日本文明を成せんとしたるは其源聖德太子に出す黑板博士多年研究の蘊蓄を傾けて太子の精神及事業を講ぜんとす大に日蓮主義者の傾聽を要すと。聖德太子と日蓮聖人の默契は眞に神祕の消息を見る。本誌は博士の要綱を報ずべし

■相撲の幕內　にて大門岩日蓮信者にて土俵に上りイザといふ前に必ず南無妙法蓮華經と題目を唱ふと云ふ、勝敗以外に斯事甚だ好矣

■眞宗から一　代法華に改宗した大潮關も亦强信心といふ但し清正公の外に稻荷にも祈信心とはさもしい清正公の勝守は斯界巾利と云

日蓮聖人教義綱要（第廿一回）

井村日成

第七章　發心

第二節　發心の動機

發心の根元は人生の自覺より起つて來るのであつて、若も人生の自覺が誤つた自覺であり、完全に目醒たるものにあらざるときは、從つて其發心は正しからざるものであるが故に目の醒し方が大切な事である、よくあることであるが人が眠に就いて居る場合、起し方が惡いと一日頭痛のすることがあるが、丁度發心の仕方もソーである、下手に目を醒すと取り返のつかぬ横道に踏込む樣な事になるから、餘程氣を付けて目醒めねばならぬのであります、其自覺の動機は人各の境遇が違い、周圍の事情が異なる處よりして種々に分れて居るのである、華嚴經の中には五種の發心あるを擧げ、優婆塞戒經には十種の發心ありと說き、毘婆娑論には七種ありと云はれてあるが、天台大師は之を綜合して、止觀の一の卷に十種の發菩提心として示されたる、或は、種々の理も推して發菩提心す……

或は、佛の種々の相を觀て……

或ば、種々の神通を視て……

或は、種々の法を聞て……

或は、種々の土に遊び……

或は、種々の衆を視て……

或は、種々の行を修するを見て……

或は、法の種々の滅を見て……

或は、種々の過を見て……

或は、他の種々の苦を受くるを見て……

の十種である、又現今の宗教學では宗教心の萌芽は左の場合に發生すると云ふて居る。

一、恐怖心、　二、生存の欲求、　三、宇宙的感情、　四、神秘性、　五、倫理の實行、　六、求智の欲求、　七信賴心、

此中には幼稚な宗教心もあるが、宗教心發生の各面を擧げて居るのである、一人一人に就て、其發心の動機を調べて見たならば、其何れかである、本多日生師は聖語錄編纂の際に發心の動機を感應的發心、實在的發心、神秘的發心、懺悔的發心、道義的發心、推理的發心の六種に分ちて居らるゝ此は各方面の所論を綜合して分類せられたのであるから、今は此分類に從ふてお噺を致さうと思ふ。

甲、感應的發心

此は佛の大慈悲に感奮して起す處の發心である、我等一切衆生の父たり師たり主たる本佛世尊は、常恒不斷に我等衆生を愍念して、每自の悲願、暫くも佛事を廢せず說法教化し給ふを聞いては、如何に無感覺の我等なりとも、其大慈大悲の思召を無にすること出來ないであろう、其の大慈悲の思召に感奮して信仰に入るのが此種の發心である、中には小なる欲望から、佛樣の御救を求むる樣な信仰もある、此等も此種の部類に屬すべきではあるが、こんなのは目覺め方のよくない方である、眞正の目覺め方から行のは、佛の大慈大悲の思召と我等の信仰とが結付いて、感應道交した處に、御利益が現はれて來ると云ふ處から發して來た發心であらねばならぬ、斟量品に

我常に衆生の道を行し道を行せざるを知つて度すべき處に隨つて爲めに種々の法を說く、

毎に自ら是念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめん

とお說きに相成つたのは、如來の大慈大悲をお示し下されたのである、勸持品には諸菩薩か佛樣に向ふて、

唯願くは世尊他方に在ますとも、遙かに守護せられよ

とお願したのは我等衆生の信仰をは實現したの

である、此慈悲と信仰とが結付いた處に我等は救濟を受け得るのである、日蓮聖人は感應の利益虛からざるを示して

大地は指さば、はづるゝとも、虛空をつなぐものはありとも、潮のみちひぬ事はありとも日は西より出るとも、法華經の行者の祈の協はぬ事はあるべからす。（遺九〇六）

信心の水すまば利生の月必ず應を垂れ守護し給ふべし（遺六七二）

御祈の協ひ候はさらんは、弓の强くして、つる弱く、太刀つるぎにて仕ふる人の臆病なるにて候べし敢て法華經の御失にては候べからず。（遺一一四六）

と云ひ、更に衆人信仰の目的は、現世小事の爲めにあらざるを示して

日蓮は少より今生の祈無し、只佛に成んと思ふ計り也。（遺一六三四）

と仰せられたが、我等も此成佛の大事の爲めに發心すべき樣心掛けねばならぬ但し多くの人は病氣杯の際に信仰に入るが其等は小なる感應的發心と云ふべきである。

乙、實在的發心

此發心は一面に我身の無常なるを觀し、苦痛の生活なるを自覺し、一面に佛陀の境界を見聞して發す發心である、止觀の十種發心の中に、佛の種々の想を觀て發心するもの、種々の土に遊びて發心するものとあるのは此部類に屬すべきものである、此發心は我身の自覺が根本であるから、此世に於て、最愛の妻に逝かれるとか、愛子に分れるとか云ふ樣な不幸に出逢ふて、信仰の道に入る樣になる場合が多いのである、一體我等は橫着な根性であるから、其場合には痛切に信仰の必要を感ずるが、喉元過ぎれば熱さ忘るゝで、時を經るまゝ忘れ去ることが多い樣であるが、此人生無常を直感した場合に速に信仰に入つて大慰安を求めねばならぬ、斯る際に求むる處は卽ち實在の觀念である、いとし我子は何れに去りしか、何れに新しき生活を求めしかとの考は必ず起ることであつて、無宗教者の考ふる樣に消滅し去つて何等の跡力も無いものであるとは思へない、それでは滿足し得るものでは無い、そこに實在の何物をか求め來るのである、宇宙に於て、實在の意義徹底せるものは之を佛陀に求むるの外は無い、壽量品には佛壽の無限なるを示して

壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。

生死の若は退、若は出あること無し。

慧光照すこと無量にして壽命無數劫なり。

と說き、妙莊嚴王品と妙音品には、其身相の勝妙なるを說いて、

佛身は希有にして端嚴殊特なり、第一微妙の色を成就し給へり。（妙莊嚴王品）

身は眞金色にして無量百千の功德莊嚴あり、威德熾盛にして光明照耀し、諸相具足して那羅延堅固の身の如し。（妙音品）

と云ひ、更に國土の實在を示して、壽量品に

我此土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸堂閣、種々の寶を以て莊嚴し、寶樹には華果多くして衆生の遊樂する處なり、諸天は天の鼓を擊つて常に諸の伎樂を作し、曼陀羅華を雨して佛及大衆に散ず。

と云ひて其淨土の欣求すべきをお示し下された此不滅の佛陀と實在の淨土とを、現在我等が苦惱の生活に對照して向上に志すのが此種の發心である、日蓮聖人の御論に

夫生を受けしより死を免かれざる理は、賢き帝より、卑しき民に至るまで、人ごとに是を知ると雖ども、實に是を大事とし、是を歎く者千萬人に一人もありがたし、無常の現起するを見ては疎をば恐れ、親をは歎くといへども、先立はかなく、留はかしこきやうに思て、昨日は彼のわざ、今日は此事とて徒らに世間の五欲にほだされて、白駒のかけ過ぎやすく、羊の歩の近づく事を知らずして、空しく衣食の獄につながれ、徒らに名利の穴にをち、三途の舊里に歸り、六道のちまたに輪廻せんこと心あらん人誰か歎かざらん、誰か悲まさらん。（遺五四一）

と仰せて、人生の自覺を促がされ、進んで其求むべきを擧げて、

但在家の御身は餘念も無く日夜朝夕南無妙法蓮華經を唱へ候て、最後臨終の時を見させ給へ妙覺の山に走り登り、四方を御覽ぜよ、法界寂光土にして瑠璃を以つて地とし、金の繩を以つて八つの道をさかひ、天より四種の花ふり、虛空に音樂聞え、諸佛菩薩は皆常樂我淨の風にそよめき給へば我等必其數に列ならん法華教はかゝるいみじき御經にておはしまいらせ候。（遺一六三六）

とお示しに相成り、返すゝも信心の肝要なるを御論に成つて、左の如くお示に相成つた。

三界無安猶如火宅は如來の敎、所以諸法如幻如化は菩薩の詞なり、寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし、本覺の栖を離れて何事か樂なるべき、願くは現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後世の弄引なるべけれ、須らく心を一にして、南無妙法蓮華經と我も唱へ他をも勸めんのみぞ今生人界の思出なるべき。（遺四七六）

丙、神秘的發心

我々人間は萬物の靈長と云ふて居るが、何處が靈長たる所以かと考へて見ると、我々の能力は、空を飛ぶことは鳥に及ばず、水中に泳ぐことは魚類に及ばず、山を走ることは獸類に及ばず、嗅覺は犬に及ばず、視力は猫に及ばず、所有の能力は禽獸にも劣る樣なものであつて一向萬物の靈長と云ふことは出來ないが、少し勝れて居ると思ふのは、智識の點であるが、この一番偉磊と信じて居る智識と雖ども絕對に勝れて居るのでは無くて、比較的に少々立勝つて居ると云ふ丈の事である、文明開化の今日に於ても未だ人智の及ばざる點は澤山ある、追々發達は仕樣けれども、徹底して一切を研究し盡すと云ふことは前途遙遙と言はねば覺束ない智慧を唯一の手賴として、萬物の靈長と偉張のであるから、甚だ怪げな靈長と言はねばならぬ、そこで世の中には人智の及ばざる程度の處を之を不思議とし理外の理として、神秘的に之を認識することが必要と爲つて來る、元來宗教の信仰の全體が、我等の智力の及ぶ處にあらざれば、凡てが神秘的のものと言はねばならぬのであるが、或程度迄は人智に依り理解し得ることが出來、より已上は信仰の力に依つて求め得ることが出來るものもあるが、全然理解し得ない事がある、實在觀念とか感應の意義とか道義とか推理とか云ふ事柄は前者に屬するので或程度迄は人智の及ぶ處であるが、神秘的の發心は始めより人智の及ばざる處に宗教心の發動を起すのである、之は野蠻蒙昧の時に、恐怖心に依つて起つた宗教心の如きこれである、故に曾つて神秘と爲した事も人智の開發に依つて神秘で無い樣になるのである、佛敎に於て云ふ處の神秘とは佛陀の神通力の活動を言ふのである、止觀の發心の中には或は種々の神力を觀てる、經に發心するものと言ふたのは此である、諸佛敎世者大神通に住して衆生を悅ばしめんが爲めの故に無量の神力を現し給ふ、舌相梵天に至り、身より無數の光を放つて、佛道を求むる者の爲めに希有の事を現し、給ふ。と說き續いて十神力の示現があるが、但不思議と云ふより外はない、妙莊嚴王品には妙莊嚴王の二子淨藏淨眼が父の王の爲めに十八變化を示して、神秘の力を以て、父王の邪見を翻さしたことが說いてある。

汝等當に汝が父を憂念して爲に神變を現すべし、若見ることを得ば心必ず情淨ならん、乃至、此我二子已に佛事を爲しつゝ神通變化を以て我邪心を轉じて佛法の中に安住することを得せしむ。

と、神通變化に依つて、佛法の中に安住することを得たと說かれた、今の世にも催眠術者杯の爲めに神秘的信仰に入る者はある樣であるが此等の輕薄な神秘は佛陀の神通力とは似もつかぬ僞物である、用心せねば飛んだ目に逢ふことである、要するに神秘の信仰は佛陀の像大な靈力より發した神秘でなければ眞物では無いのである、宗祖聖人神秘の信仰を示して左の如く仰せられた。

指せる解無くとも南無妙法蓮華經と唱るなら

に依つて起つた宗教心の如きこれである、故に

ば惡道は免るべし、譬ば蓮華は日に從て回る、蓮に心無し、芭蕉は雷に依て增長す、是草に耳なし、我等は蓮華と芭蕉の如く、法華經の題目は日輪と雷との如し、乃至琥珀は塵を取り磁石は鐵を吸ふ、我等が惡業は塵と鐵との如く法華經の題目は琥珀と磁石との如し是の如く思ふて常に南無妙法蓮華經と唱ふべし。（遺五八四）

デモクラシーと佛教と國體

松尾城皷

(七) 幸福を目的として

自由平等解放等を更に押し縮めて歸結の精神を要約したならば、自己の本有天賦を傷けずして安全幸福の境地に入り、平和なる人生の享樂を完うするといふことに外ならぬ。之は幸福を享くるに就て言つたのであるが、之を與ふるとして見るときは國家としては政治問題となる。

（以下述ぶる處は政治そのものを論議するのではない宗教及び哲學より觀たる政治論にすぎぬ）デモクラシーの發達中途における政治支配權に就ては一人の手に、又は少數人によりて行ひ、又は多數人の手に屬するといふ三說を爭つて來て居る。多數政治（民衆政治）といふことが同主義に於ては結論となつて居るけれども、多數にしたところで其多數が私利私慾の目的があつたならば、其の及ぼす所は弊害を生むまでである。少數政治にしても民衆の幸福を目的として何等私利私慾の心を挾まなかつたならば其結果は國利民福となつて現はれるのである。であるから其多數であると少數であるとを問はず、主眼とする所は公平無私の精神が肝要である。

要は全人衆が幸福の享受に滿足することに結歸するのであるから、我が國體を檢覈するに、自由平等解放を與へ、眞の幸福を與ふべき質を有して居つたならば、何も外來のデモクラシーに降伏するにも當るまい。否素性の惡い危險性の混同して居るものよりも純の純たる美しい我が國有のデモクラシー、イヤ、デモクラシーと謂はねば一部の人間には氣に入るまいから假りに斯う言つておくが、實は我が光輝ある皇道主義を發揚して太陽の光輝の前に月の光りたらしむべく顏色なからしめることは光榮ある歷史を有する日本人の爲すべき仕事であらう。

(八) 太陽心と仁慈と公正

太陽の光と言つたが、我が國は如何にも太陽を例に引出して最もよく本性を現はし得ることが出來る。公平と云へば太陽ほど公平のものはない。彼は決して日本國その頭を照らすではないか。彼は決して日本國ばかりを照らさない。如何なる國をも照すのである。星の國の亞米利加が人道とか正義とか言ひつゝモンロー主義を提げ、又皮相の人種を以て國に高樓を築き自己の私慾を保護するといふやうなことは、此太陽思想から觀れば卑しむべき不公平である。我國は其祖先であり、最高の尊貴にましますの神として崇敬して居る天照大神の御德を太陽の光輝に比し奉り、此平等の德に感謝し、此鴻德にあやからんとして居る人種である。我國旗の日章は太陽を象り又大神の御德を象り奉り世界に向つて即ち公平平等無私を暗示し指敎して居るのである。此旗一つでもデモクラシーどうだドーだと言つたなら、いかにも成る程と平伏してもマアよい位なものである。

此太陽心は又仁慈心であつて、我皇室におかせられては御代々此心を有ち給ふのである。之を大御心と申し上げるのである。天津日嗣と申すのは此公平心、仁慈心を繼承し給ふて、民衆の幸福を御軫念なし給ふ意義に立たゝせらるゝを申すのである。高御座に就き給ふことは畢竟太陽心に住し給ふことに外ならぬ。此太陽心の理想の如き浩大にして高明なる意義に對して何物か一點の非難する所があらうか。

光仁天皇の寶龜三年五月皇太子他戸王を廢し給ふの詔に『其高御座天之日嗣座ハ吾一人之私座ニ非ズトナモ所思行ス』此御心に住し給ふて國政を覽るのであるから私があらう筈はない。即ち高御座にましますのは公平高明を證せられて居るのである之は私の爲に公座として人衆の表現としてく人衆全體の爲に公座として人衆の表現として

上り給ふ義理である。

(九) 日心と仁慈

我國に於ては『日心』と云ふ漢字を用ゐてゐる語があるが之は『あまつこころ』と訓むのである。此日心は即ち公平無私を指したものであつて、上御一人は必ず此御心を有してお在になるのである。此心は上に有してお在になるばかりでなく實は國民一般が有つて居らねばならぬのである。此心が上より下に向つては仁慈となりて民衆の幸福を祈り給ひ、民衆は各自此心を有つて居るが故に、行ひに私利私慾なく人衆相互の幸福を進むることになるのである。であるから眞に此心が全般に徹底すれば民衆は苦痛なき境涯に到るのである。

日心は前に述べたる太陽心であつて即ち仁慈心であるから民衆に對し仁政を布いて幸福を祈り給ふ例證としては即ち文武天皇即位の詔に『此天津日嗣高御座之業ト云々倭根子天皇命ノ授ケ賜ヒ負セ賜フ尊キ高キ大命ヲ受ケ賜リ恐坐シテ此食國天下ヲ調セ賜ヒ平ゲ給ヒ天下ヲ公民ト惠ミ賜ヒ撫デ賜ハムトナモ隨神所思行サクト詔フ天皇カ大命ヲ諸々聞食ト詔ル』とあり、又慶雲四年七月元明天皇即位の詔に『遠高祖御世ヲ始メテ天皇ガ御世天津日嗣ト高御座ニ坐テ此食國天下ヲ撫デ賜ヒ慈ミ賜フ事ハ辭立ニ在ラズ人祖ノオノガ弱兒ヲ養治ス事ノ如ク治メ賜ヒ慈ミ賜ヒ來ル業トナモ隨神御所念行ス』とあり、又神護景雲三年稱德天皇の詔に『朕ニ勅タマヒシク天下ノ政事ハ慈ヲ以テ治メヨ復上ハ三寶ノ御法ヲ隆ナラシメ出家道人ヲ治メマツリ諸天神地祇ノ祭禮ヲ絕タズ下ハ天下ノ人民ヲ愍ミ給ヘ云々』とある如き何れか人衆の幸福を軫念あそばしてお在にならぬものがあるか。

(十) 清明心と恩德感謝

古代の詔勅に屢々『清明心』即ちきよきあけきこゝろ『又明清』即ち『あけくきよき』等の言葉が使はれて居る。之はやはり『日心』とおなじ事であつて帝の御胸中何等一點の陰翳なく假へば明鏡の眞澄に澄みて一點の曇りなきが如く、公平無私なること天徹り地徹り大虛空の障なきが如く、此清明心は潔白日の調であつて歷代の天子の日嗣に宿り玉ふ大御心がそれである。若し天子にして此御心を缺き玉ふことがあつたならば、それと同時に神意に背くのであるが、我が皇室に於ては此心即ち皇室の尊嚴である。道理はない。畏けれど上御一人としては、假りに何事を缺き玉ふことがあつても、神意より起る此尊き清明心を保ち玉ふといふ唯一つの大事によつて世界に萬乘の威德を耀かし玉ふに足るのである。之が諸外國の王室に求められぬ尊貴である。此御心の中には、人衆の自由も平等も解放も靈し含んで居るのである。人衆のすべての幸福を念願として立ち玉ふ此大御心を有し玉ふ天統の天子に臣屬してその恩德に感泣して生死を屑とせず忠節を盡さんとする我國民は高潔なる義士と謂ふべきである。

近來恩德に成謝することゝ壓迫に屈從することゝを混同して意義ある忠孝節義をも恥辱の屈伏なるが如くに考へ自己の小さき我慢心を增長して快とするの思想を生じて居るものがあるのは慨嘆に堪へぬ。義に從ふこと水の低きに就くが如きは實に男子の面目である、今我皇室の如き天地の公道を規矩として六合を透徹する清明心に位立し玉ふ大なる有意義の下に臣民の禮を執つて身を努め心を勵むは實に人生の幸福であり愉快である。小我心を募つて大義を滅却せんとするは下劣なる思想に溺養せられたる不義者である。元來西洋人は代價を以てされたる傭人根性より外知らぬ眞の正しき忠義の意味を知らぬ人間であつて此等の唱道したる議論にかぶれてそれが高尙なる有意義であるかの如く考ふる者輩は自己を劣等に引下ぐるものである。外來思想の珍奇に眩惑して我國に正義公道の固有せる事を知らぬばかりでなく、却つて之を罵り惡しざまに言ひ下さんとするが如きは、淺薄なる我生父を罵つて隣家の狡猾爺を賞揚し措かざるの類である。慎しむべきことである。

(十一) おほんたからの意義

外來思想のうちに於て解放を高調する中に、國王が人衆を私有すると稱へてこは即ち奴隸と

するものなりとして之を解放せよと叫ぶ。成る程外國の中には曾て人衆を私有物視したものもあつれであらう。又私有物視すべく國王と國人との成り立を有てゐだであらう。我國に於ても武將などの領民を私有物視した事もある。之は勿論間違つて居るのであるから、之を解放撤廢することは言ふまでもない。併し我國の皇室と人民との間は少しも斯かる事はない。我國全人民は卽ち一家であつて、悉く神の裔孫として氏を尊び姓を重んじ國家の盛衰は取りも直さず自家の盛衰として喜憂して來たのである。日本人は一人一個であるけれども、直ちに一家一人である。一家一人であるけれども、直ちに一國一家である。その一國一家の中に全人民の總本家として皇室を圍繞し尊仕しするのであることが一家の中に戶主が中心として平和團樂の家庭を作つて居るやうなものである。であるから天子の方から人民を見るときは愛子である。私有どころか侮蔑どころか『おほんだから』と申されて居る。記錄に依ると『おほんだから』は『百姓』又は『公民』と漢字を用ゐてあるが、此漢字では充分の意味は現はれて居らぬ。此意味は人衆あつての國家であるから、人衆卽ち尊むべき大なる寶であると稱贊し玉ふたのである。私有の民から解放して公民となすことが彼等の希望であるといふのであるが、抑も我國では解かうにも放さうにも元から公民であるのであるから、解放の仕樣がないではないか。イヤ公民どころか『おほんだから』であるのだから、これより以上言ひやうも思ひやうも仕樣もないではないか。

谷本富博士が此の『おほんだから』といふことに就いて之は尊んだやうで實は卑しめたものである。之は人民を通貨の如く考へたから名づけた名稱である、其證據には寶永通寶とか天保通寶とかいふことから考へてもよからう、人間を通貨として考へるのは取りも直さず私有物視する意味は充分あると、大體斯ういふやうの事を言つて居るのである。御存じの通り谷本博士は乃木大將を野卑なる下相を有する人であると大阪毎日に惡口を言つて社會から擯斥された人である。その下相といふことも石龍子の骨相學を受賣りをして之を無理にあてはめ、其當時乃木大將に對する社會の賞贊は絕頂に達した時であつたから何か物珍らしい事を言つて虛名を博せんとした卑しむべき心であつたのである。（それは當時の大每を讀めば心あるものは思半に足る）かういふ人であるから、此『公民』に就ても何等研究もせず、詭辯を弄したのである。それは我國の記錄に於て『公民』が早いか『通貨』が早いか孰つちが早く記されてあるかを見たゞけでも博士の放言であることは知れる。公民と通貨とは『たから』といふ言葉がついて居るから、假りに關係を有てゐるとして考へた場合、人衆を尊んだる『たから』の言葉が立派だから、其後に通貨を作つた際に通貨なるものはお粗末にすべきものではない、寶の如く、否寶として尊重せねばならぬとして命名したとも言へば言へる。それを何ぞや逆にとつて『公民』を通貨同樣に見たのだといふことは牽強附會にも程がある。

上から人衆に對して『おほんだから』と言つたことが氣に入らぬとしたら、こんな事があるがどうだ。『元元』といふ漢字を用ゐて『おほんだから』と訓んである。之は畏くも皇祖および神統御一人を指して全人民より尊稱し奉る言葉である。公民といふ漢字、元元といふ漢字成る程漢字は相違して居るが、漢字を除いて了つたらば、あとには何れも唯『おほんだから』といふことが殘るだけである。卽ち人民も『おほんだから』皇室も『おほんだから』である。言葉では皇室も人民も同じく『おほんだから』で何等此間に差別の發音を見出すことが出來んのである。唯、一は人民より稱へ奉るのと、一は皇室より呼び玉ふとの違ひだけである。我國體に於ては皇室と人民との間はこれほど接近して居るのである。明鏡と明鏡と相對して其間に何物の片影を見ざるが如きものである。親の慈愛を仇にして之を恨み罵る不孝の倅と同樣、仁慈深く海の如き我皇室に對して何の不足があつて苦情を言ふか。されば我完全完備の國體に對しては、デモクラシーもヘモクラシーもない、幽の立ち處はないではないか。外國の國體は何れでもあれ、不完備なる外國の國體を目安として研究されたる國家論を我珍に美しき神聖なる我國體に同樣に押し當てゝ兎や角言ふものがあつたとすれば、それは方角違ひと謂はねばならぬ。

（十二）結論

要するに外來思想のデモクラシーを佛教の大乘觀より眺むるときは、幸福を目的とし自由平等解放又は機會均等などの要求としては佛教の思想と相似て居つても、其結果として彼は惡結果に終るにすぎぬのである。

又我國體より之を觀も之は既に過去に於て理想として實現し、唯洗練し圓滿の境に達すべく出來て居る我國性の前には無用の長物である。我國の皇室を除いては我國民はないのであり、又我國民を除いては皇室は現はれない上下一體の最良理想の國體を有して居る此日本國に何の必要があつて成りあがりのデモクラシーなどを丸呑するの危險を敢てすることが出來ようか。

我國體と合致して人衆の幸福を保障して居る大乘教から言つても、又我國體から言つてもデモクラシーの議論の如きは珍しくも何ともない一段低い陳腐な思想にすぎぬ。だから言はんことではない、一時はマルデ天を焦がすやうな勢で黑烟を漲らしたデモクラシーも、今では大方消えかゝつた下火である。古來幾多の外來思想が侵入して一時は何れも我國質をなみしはせぬかと位に思はせても大風一過やがて何處へか消えて了ふのが常である。之は要するに我國體に於て實に儼乎として冒すことの出來ぬ力强い大精神を持つて居るからである後來といへども、如何なる所說が輸來しても少しも恐るゝことはないが、併し日本人がこの大なる精神より離れて了つた時には、由々しき大事となるかも知れぬから、我國民たるもの菅公の『和魂漢才』の例を引くまでもないが、洋才までは可いけれども和魂を忘れたり落したりせぬことが肝要である。

機微譚語

山根青村

八四　闇齊の三樂

山崎闇齊は京都の人、名は嘉字は敬義通稱嘉右衞門と稱す、朱學の大家なり、晚年會津侯の脊遇を受く。侯嘗て闇齊に問ふて曰く、先生亦樂みあるか、答て曰く臣に三樂あり、凡そ天地の間生あるもの何ぞ限らん、而して萬物の靈たるを得、是れ一樂なり。一治一亂定數なり、而して右文の世に生れ、書を讀み道を學び古の聖賢と膂を一堂の上に把るを得、是れ一樂なり、是れ臣の樂む所なりと。侯曰く二樂既に之を聞くを得、請ふ亦第三の樂を聞くを得ん。曰く是れ其の最も大なる者、言ひ難き所以の者は君侯必らず信ぜず、以て毀譽誹謗と爲さん。侯曰く寡人不敏と雖も先生の言を奉じ孜々諫を求め忠言を渴聞せん、何爲ぞ今に至りて教を終へざる乎。曰く君の言此に及ぶ、臣假ひ戮辱に逢も豈言を盡さゞらんや、所謂樂の最も大なる者は、幸ひに卑賤に生れて侯家に生れざる是なり。侯問ふ何の謂ぞや、曰く言ふこゝろは今の諸侯たるもの深宮の中に生れ婦人の手に長じ不學無術聲色に徇ひ遊戲に耽り、之が臣たる者もつはら主の意を迎合して、其爲所因て之を稱譽し其爲さゞる所因て之を非毀す、斯くて遂に本然の性をして梏亡消滅せしむ、其卑賤の身幼より辛苦を嘗め長じて事務を習ひ、師敎へ友輔け以て

其智慮を益す者といづれぞや、是れ臣の卑賤に生れて侯家に生れざるを樂の最も大なるものと爲す所以なりと。侯之を聞て茫然自失す、嘆息して曰く誠に先生の言の如し。（先哲叢談）

然り順境は精神の緊張を缺き人をして墮落せしむ、少くとも我儘氣隨を增長せしむ、先天的非凡の人材にあらざるよりは達士となるもの稀なり。之に反して逆境に生ひ立ちしものは、其さに辛酸苦楚を嘗めて开處に琢磨洗練、身心を鍛へ上げて大に自己の性能を啓發す。逆境なる哉逆境なる哉、宜しく逆境の恩寵に感謝すべきなり矣。由來人間の價値は族姓の高下によりて定まるものにあらず、智能の啓發如何にあり、腦髓手腕の如何にあり。而も世人多くは見得坊にして、僕不肖なりと雖も先祖は槍一本の主なり、斯う見へても生家は相當の資產を有し鄕黨に幅を利かせり杯、自己鼓吹に浮身を窶す。何ぞ進んで予は水呑百姓の子なり、而も予の主義主張は天地の公道と一如せり、予の生家は赤貧洗ふが如く卑賤の極なり、而も正直律儀俯仰天地に愧ぢざるを吾家の誇りとすと言はざる。てもこの淺猿しき凡夫の根性かな、よし先祖が天律兒屋根の命であらうと、菅原道眞の末孫であらうと、其人の人格劣等にして社會人生に何等寄與する所なく、剩え有害無益の祿てなしたらん乎、族姓の高貴何かあらん。聖日蓮の族姓自白於是乎價値ありの凡夫を反省せしむべく萬代不滅の洪範を遺し給へり。

聖語、　日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり○心には法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶ほ恐ろしと思はず。（佐渡御書）

八五　膽大と心小

岩崎彌太郎は明治商業界の巨星たり、其度胸に於て將た其平生の心懸に於て、寔に不世出の富豪となるべき素質を有したり。先年郵船會社の所有船が某所に於て不幸沈沒の厄運に逢ひし時、船長は痛く其罪を咎められんことを恐れ、辭表を懷中にして岩崎邸に到り、涙ながらに其失策を謝し且つ速かに解雇あらんことを請ひたるに、彌太郎は平氣に盃を啣みながら之を聞きて微笑しつゝ『ナーニ海運の事に從ふからは船の沈沒することは覺悟の前なり、決して謝するに及ばず、併し乍らたゞ平生毎日船員の使用する所の筆紙墨等の事に注意し、成るべく他人の物と思ふて無駄使ひをせぬ樣よく〳〵船員に諭し置き呉れよ、凡そ何事に限らず多人數を使用する營業は、日常の失費ほど巨額に上るものはあらじ』と。船長大に感激し、終に其懷中の辭表を出すに及ばずして、唯々として退きけり。（偉人言行錄）

針の耳より天を覗くがごと絲より細き小さき心もて、厘錢の損耗にもビク〳〵する樣な膽魂にては、迚も巨商富豪となること難し、須らく斗大の膽を持すべし然も其膽力たるや据ゑべき所に於て須らく海の如き度胸を要するのみ、若し夫れ小心なるべき所に於ては、何處までも注意周到厘錢の無駄遣ひをも爲さゞること、是れ亦豪商となるものゝ第一に心懸くべきことなりかし。啻に商人に於て然るのみならず、すべての職業に從事するものは此膽大心小の兩面に徹底せざる可らず。聖日蓮の行動、卒爾に之を見れば大膽不敵萬事を不撓不屈て押し通せるが如きも是れ意思の堅實なる方面に於て然るのみ而も其半面には何人も企及し能はざる底の細心愼密なる所あり、一旦決心して火蓋を切りし以上は、肉飛び骨碎くるも之を遂行するの勇氣旺溢せり、而し斯く決心するまでには人一倍の注意、寧ろ臆病者の如く些事末節にも行屆ける綿密の用意を具備せるなり。金吾頼基に對する訓誡の周到なる、家庭の些事に迄て所謂養き所に手の届けるを認め得。嗚呼大膽と小心學ぶべき事ならずや。

聖語、　又御舍弟共には常に不便のよしあるべし。

常に湯錢草履の價なんど心あるべし。とがありとも少々の失をば、しらぬやうにあるべし。（四條金吾御書）

漢題和歌『山路躑躅』

子爵　清岡長言選

○天　本所區吉田町　勝田宜和
くれなゐにほふ山路の花つゝじはるの深さを色にみせつゝ

○地　福岡市外　熊澤優子
ふみわけて登る山路の右左躑躅にほへり家土產にせむ

○人　雜司ヶ谷　矢野浪子
つゝら折けわしき道も岩つゝし咲けるあたりはのとけかりけり

○入選

○子を連れし春の山路そたゞ〳〵し手にあまる迄つゝし折りつゝ　靜岡　佐原弘風

○保津川の流れみおろす山道のいはかねに咲くにつゝしの花　京都　中野正甫

○夕くれに山路を歸る賤の男か妻木にさせる花つゝ數　千葉縣　渡邊乾航

○たゝ一人たとる山路にくれなゐの色うるはしく岩つゝさく　同　林忍子

○つま木こるときはの山の道もせに咲きて匂へるいはつゝしかな　同　柳橋八重子

○しのふ山わけ行道に色はへて夕日まはゆく岩つゝしかな　同　以波戸あき子

○いり日さす夕くれなゐに色そへて山路をてらす岩つゝしかな　同　春日よし子

○柴人の家路に歸る夕暮に行くてをてらす丹つゝしの花　同　竈島正之

○旅人もつかれやしはしわすらん山路に匂ふつゝしながめて　同　並木うめ子

○花つゝし咲の盛りはぬは玉のくらまの山路迷はるゝらむ　同　萬新舍一止

○まはゆくも夕陽そめゆくやまみちの姫つゝしこそ今さかりなれ　同　堀江得一郎

○咲つゝくつゝしの花にあくかれて今日も遊ひつ春の山路　下總　皇野聖祐

○あつさゆみ春の夕日のおこりにと山路に匂ふにつゝしのはな　下谷　小柳律子

○丹つゝしの花さきにけりやまかつかかよふ山路のみきにひたりに　丹後　廣岡圓

○夕まくれ山路にいとふ柴人のたく火と見ゆる花つゝしかな　同　小柳威之允

○少女子のつゝしの花を黑髮にかさして山のみちたとるらん　千葉縣　醒醐榮司

○著聞山こその枝折を色々におもひまとわす岩つゝし花　下谷　小柳英夫

○以後この以下記事は成るべく宗門に關係あることを書きます。

趣味餘滴

はなぶさ生

(一)宗遍遺愛の茶釜

豐橋の妙圓寺(松本堅晴師住持)で去年寺寶を見た。比較的多くの書畫骨董の中に自分の嬉しく見られたものが一つ。それは九兵衛作淨雪の極の附いた大覆の茶釜であつた。其の傳來としては山田宗遍が妙圓寺に滯在して使用して居たもので愛頒の琵琶と共に同寺に遺してをいたものだと云ふことである。

山田宗遍とはどんな人か、宗遍は日蓮流の僧侶であつて、利休流の茶に通じた大宗匠で四方庵と號し元祿年間に江戸に住して居た。門人は之を仰いで茶祖とし爲に宗遍流の一派が立つて居るほどである。

俳諧の宗匠其角と赤穗義士との關係は人の皆熟知して居るところであるが宗遍と義士との關係を餘り知らぬ。元祿十四年十二月十四日の夜吉良家に暮の茶會があることを聞き出したのは實にこの宗遍からである。宗遍は大宗匠として豫て吉良上野介と交際があつた。茲に義士の一人堀部安兵衛の懇意に田村齋宮と云ふ劍道指南の浪人があつた、此人は三十間堀材木町に住居する中島五郎作の裏長屋を借りて住んで居つたが、安兵衛は齋宮から宗遍と上野と交際溫の由を聞いたので、早速この事を內藏助へ報告する。內藏助は義士中茶花俳諧に通じ風流を解して居る大高源吾を京都から下つて居る呉服屋の主人に仕立て、四方庵の門人に住み込ませたのであつた。此頃宗遍は小笠原佐渡守の屋敷內に住んで居たとの事である。胸に一物を抱いて居た源吾の禮は東修として縮緬一疋と金千疋を差し出した、大名にも例のないほどの奮發であつたと云ふ。

松本師よ右のやうな歷史附の人物が所持して居た茶釜ですから御大切に御保存あらんことを、成るべくは一度その釜で茶を一服頂戴致したいものですな。呵々

○姫小まつ生ひたる山の路の邊にもゆるはかりに
咲つゝしかな　千葉縣　笠見　樂也
○のどかなる夕日くれゆく山道にみたれても咲く
岩つゝしかな　同　小川　藏司
○山人の休む岩根の岩つゝし今を盛りとさき出に
けり　三河島　西澤　明花
○水音も清き山路の細流れ咲やつゝしの影をうつ
して　大阪　長尾須之助
○明けやらぬ中にも赤くみゆるかな山路のつゝし
さかりなるらん　麻布　大塚　曉花
○山みちのかたへに入日てりそひてもゆるか如き
岩つゝしかな　大阪　竹內　軌榮
○蝙蝠のかさにつるせる一枝のつゝじはゆれて山
路行くなり　東京　金山　猪助
○うら山をくだりて見れは岩清水きよくも咲ける
つゝし花かな　白山　松尾　周子
○伯母上によはれて歸へる山路に今盛りなる花つ
ゝしかな　同　松尾田鶴子
○邊近の山のつゝしは紅に今を盛りと咲出にけり
高岡市　古谷孫左衛門
○山かつもつとに折るらんむ夕日かけまはゆくさ
ゝむる花つゝしかな　巢鴨　岡田　昭子
○行く春のかたみに深き山路にもねさすつゝしに
色そとゝむる　同　白　菊
○人も見ぬ山路の躑躅咲き初めて應を外なる姿貴
き　千葉縣　岡木　琴子
○つかれたる足をとゝめし山路に今さかりなる花
つゝしかな　同　戸田　浮葉

法華信者(俗人)が手取り早く看取せんとした佛教の研究概要

一信者　金山猪助(寄)

(一)序正流通

釋尊一代の經典に對して手ッ取り早く其中心點の質實を探究し得る方法として序、正、流通の見方がある。天台流の經相判に記されたる五時、所謂華嚴、阿含、方等般若、法華涅槃の一代經を通じて『正』は即ち釋尊の本精神である。諸經各々『正』はあるのであるが、一代經を通じて觀たる『正』は法華經に留止つて居るのである法華以前(華嚴阿含、方等、般若)は法華に對すれば序說で、涅槃は流通である。序とは素人語で云つたら本旨を明すまでの準備とでも云つたら好いと思ふ、釋尊の法華以前の述說は四十餘年である、四十餘年も法華開說の準備をしたのだと云へば甚しき御叮嚀過ぎたやうにも思へるが、之は其時代の學者(聲聞、緣覺等)及び時代人對の關係上、之れを誘引し調節したものらしい。何れにしても釋迦御自身懷抱の本旨を明すまでに諸有る努力を盡して對機說法の御苦勞(慈悲)をなされた事は感謝せなければならぬ。流通は救濟方法に於て遺洩なきを期した御用意(慈悲)として見て是又感謝に堪へないのである。

我等は先師の經判の努力のおかげで『正』の法華經であることを知つて否應なしに法華經を把り出したが、其法華經にも序、正、流通の三段を聽かされる、無量義經は法華經の爲に開經と稱して序幕であり、大切としての流通は觀普賢經であるといふ、之を結經と稱してある。それから正味の法華經八卷の中にも天台智者が一經三段、二經六段の假段分をして

○わけ登る山路にさける花つゝし折らんとすれは
露そこほるゝ　上総　岡本常三郎
○見渡せは山路の躑躅咲き初めて里の小庭そ變し
かりける　千葉縣　岡木榮次郎
○都にはまたさかねとも色ふかき山路の躑躅家つ
とにせん　同　岡木勘三郎
○雲かゝる嶺のひらきし高千穗の峰のつゝしそ道
しるへなる　巢鴨　園田　鐵蕉
○ふるさとの山のほそ路わけゆけはなしみも深き
つゝし咲きけり　大阪　山陽　雪竹
○丹波にてみまかりましゝわか祖父をとむらひゆ
けは山つゝしさく　島根縣　石橋　芳夫
○花つゝし折まほしくそ思ふかなけはしき山の道
をつたひて　大阪　池田さた子
○木々の葉の茂る山路にもえ出し躑躅の色や人の
めつらめ　千葉縣　佐藤七郎右衛門
○わけのほる山路にさける花つゝし一と枝をりて
家土產にせむ　北海道　法谷きよ子
○み山路の上にそひゑし岩かけにもゆるはかりに
躑躅花咲く　白山　松尾　清明

○追加　選者

やまみちをたとるたもともそまるまてくれなゐに
ほふ花つゝしかな

六月課題『嶺雲』

○用紙には必ず住所姓名を記されたし
○文字は讀み易きやう記されたし
○應募は必ず月末までに着のやうされたし

居るのに從つて其正味を撰り出すことが出來る。一部の中に前半に方便品を見出し、後半段に壽量品を見出し得る。結局日蓮聖人の指示に從へば壽量の一品に收まるのである（一品二半など云つても）。此の場合この一品前後の諸說は極り此の一品の裝飾品、又は手段、イヤ裝飾品とか手段とか云つて語癖があるなら何と云つてもよいが、即ち前は序で、後は流通に過ぎないのである。

これだけ知れば好いのだ。八萬四千の諸法門の中に魂魄として眼目として壽量品が尊い、是れあるが爲に諸經あり、釋尊あり、其の救濟がある事になるのである。故に吾人が聖人に依つて其眞髓として敎へられるドン底は壽量品を求め得れば足りることになる。外の事は之を得て後の問題である、之れなくんば魂なき經典となつて如何に善美を盡してあつても押し極めて本音をたゝけば空虛になるのである。故に壽量品を知らない佛學者は幾ら研學しても其眞價値を有しない事になるのである。其の壽量品は何故に尊いかに就ては別問題であるから後に云ふことにして、此には最も完美の經典の選出を先師の指示に依つて知り得る方法のみを談じたのである。（以下次號）

讀者月旦

（序言）

本誌讀者數千人の中から選り出して毎號月旦を試みてみたいと思ふ、その人選は必ずしも所謂えらい人といふばかりでなく兎に角特色のある人を物色するつもりであります。

■矢野茂君

赤い飾りのついた法服を着ていかめしく大審院に頑張つて論告をされた人だと聞いては、いづれ閻魔の廳からつり錢をもつて來やうな、おつかない人だらうと思つて逢つて見ると、案に相違の好々爺で體中に深切げの漂ふて居る人である。日蓮主義者としては日聖上人讚仰者と云ふよりも、も一つ突つ込んだ强信者である。朝夕家内一同を集めて御寶前に勤行さるゝ殊勝の委は不思議な位だ。牛ケ首聖園の完成には最も力を盡されて居り、昨年以來は勞働者慰安善導の趣旨によつて設立された自慶會の理事長として努められて居る。正四位勳二等といへばお役人としてのお役目は一段落の標證で老後の殘骸は公共事業に貢献して國家の爲に盡したいといふのを見ても其至誠家たることは言ふまでもない。但し一寸外觀不得要領のやうに見えるが、さアこゝが老巧の要領である。世話好きとしてはあらゆる問題を持込むのを以て見ても解る。文字はなか〳〵麗筆で謠曲は此道に通有性のソレその鼻握りらしいが、イヤ〳〵實際修練された濃い節の味も見えるそれて茶事に加へてバク通と來てゐるのだから隅におけぬ。本年二月花のやうな美しいやさしい詞藻に富んだ末の愛孃を亡くされたのでガッカリ力落しの風も見えるが、折角自重されて爲國爲法盡力されることは知人の皆が翹望して居る所である。

■久富久子女史

統一閣の婦人部の幹事の一人として靜かな容態と深切の世話とを以て少からず參集者が感謝の意を表して居る久子女史は、過ぐる日良人勘太郎氏に先立たれ、さらぬだに其の胸中をおし量つてゐるのであるが、併し女史としての採るべき途は定まつて居る。卯の花くだち涙の胸をかきわける一法としては、たゞ御佛に仕うまつり良人の菩提を弔ひ、信の光を浴びて、己れの憂き心を慰めるより外はないのである。この頃統一閣において宗歌や自慶會の會歌やを唱ふべく子供等のためにオルガンの前に奏でらるゝ姿を見ては、その心の底を汲みて如何にも傷はしく感ぜられるのであるが、女史としてはこれが淸い法樂として無限の情緒を結んで居られるのである。かくて女史の頭上には佛祖三寶の影向がかゞやいて居るやうに見えた。

登山僧をして意義あらしめ（其實例）

第九敎區管事　前田日應

第九敎區においては、毎年新年宴會の際に於て、登山僧其他の出席人を選定して來た例をつくつて居る。從來登山僧の意義が檀信徒部面に對して徹底して居らぬ感があるのを遺憾として居たのであるが、本年は少學統宮田良逸師當選承諾されたが、同師の希望に應じ

○應募和歌と雜用と混書されたるときは取扱上選に入らざることあるべし

○天位の人短册を受取られたる際は葉書にてよろし一寸御一報を乞ふ

爲念左に十二月までの課題を記しをかん

△七月、山家夏月△八月、濱風△九月閑夜草花△十月、暮村△十一月、山中時雨△十二月、朝煙

○躑躅の文字に就て

山田秀太郎

曾て予往年東京にありし際、石崎小洲君に、一體『つゝじ』とは何が故に躑躅と云ふ文字を選みたるかと尋ねたるに、幷は昔、唐土に於て（中略）駒が燃ゆるばかりの赤色を見て、あがきたるより起因すと云々

山にゆきもゆるかことのつゝし見てあがくふることしのはれにける

『日盛』

◎渡船場に客一人や日の盛り　新宿　鼎輪青山
◎日盛や糞櫚の虫延び縮み　應布　大塚曉花
◎小蒸汽の搖れ出る岸や日の盛　同
◎日盛の街塵中に巡査哉　三河島　西澤明花
▲氣の毒なといふ感じか、但し外に意味があるのか何がか深い印象を受ける
◎日盛や掘りこぶしをかく男　白山　かね女
◎日盛に木蔭流れて猫脊哉　大阪　山中慶山
◎日盛や下水流れず泡を吹く　長門　萩村　惟泡
◎日盛や疲馬籠に立止まる　青森　同
○泥龜を恵に伏せし日の盛　高岡　古谷靈峯
○日盛や魚釣る人の竿光る　島根縣　石橋芳夫
○日盛や趙磨の像の父に似て　千葉縣　堀江殖溪
○日盛や油の如き海千里　筑前　萩村
○日盛や親子巡禮の疲れ行　水城生
○日盛に太子が干せる草紙哉
▲寺小屋時代が回想せられる　石狩　鳥兎子
○日盛や置き替て見る鉢の竹　雲峯
○木の莖を鶏集へ來ぬ日の盛　明花
○日盛や土倒干したり一長屋　曉花
○日盛や自轉車走り犬走る
▲面も却つて閑情を催す
○日盛や蕊剃つて居る舟の人　青山
日盛りや四足のばして猫眠る　青村
日盛りや怪松崖に蟠る　同
▲日盛に柱の冷えや素赤裸　王山堂

『麥』（麥秋）

◎麥の秋歸省の人が畑に出る　曉花
◎麥を打つ裸に笠の主人哉　明花
▲ふんどし一つの男が笠のみ被つて居る圖は天下太平である
◎兄弟が訴訟の畑や麥熟す　水城生
◎麥秋や鼠引摺る魚の骨　惟泡
▲麥秋に留守を利かせたものは澤山あつたが、此位上手に利かしたものはなかつた、巧妙
○腕白き人も出でけり麥の秋　上總　岡本鶯谷
▲多忙といふを利かしたものゝ澤山の中で曉花氏

登山會の名譽を保持し意義を高むる上に於て、掛職より正式に辭令を交付したのである。これが動機となつて、住職地たる源村極樂寺、本極寺の檀信徒は此行を壯んならしむるために總會を開き、總代人等は各自金拾圓づゝを寄贈し、其他にも應分の寄附ありて、金壹百圓以上の淨財額となり、外に金柳燕尾金紋五條綸子淺葱色法衣等を新調し之を布施し、併せて盛大なる登山祝賀會を開催せり。かゝる事は千葉縣に於ては、登山會の價値を高むるのみならず、檀信徒の信仰增進に對し、奬勵となるのである。

尤も師のこの事こゝに至りしは平素の布教效果も認めねばならぬ。元來同住職寺は數十年間布教といふやうな事はしたことはないのである。然るに大正二年十二月同師赴任以來、勉學の餘暇を以て布教に盡し第一着に青年修身會を開催し、現在會員四十五名を有せり。又十二日講を設け、六十七名の講員を有せり。又婦人會、耕睡會を開催、又日曜日には少年修養會を開き、男女生七十八名を有せり。又說示會を開き土地の名士をして意見を述べしめ、又敬老會を開催する等の効果が素をまして居つたのである。千葉縣にして新檀增殖十餘戸をつくつたといふのを見ても知ることが出來る。

無論平素の教化に基することではあるけれども、登山するといふやうな時に、これを動機として檀家に刺激を與へ信仰と接近せしむるは良好方便であると思ふ。

統一團報

●本山妙滿寺大法會

花笑ひ、黃鳥妙法を誦する好時期に際し、例年之通り、洛陽總本山妙滿寺に於て大法會修行。全國各教區登山の僧徒及有志の僧侶四月十日皆着。併せて岡山縣檀信徒五十餘名の團隊を先着として、各地檀信徒潮のよせるが如く登山各宿舍に入泊。

十一日午前六時。朝の勤經、本山部長萩原權僧正、導師となり、登山の大衆着席、莊嚴なる法要。直に說教。

開會の挨拶を兼ね說教　本山萩原部長

同午前十時。銅堂財團施主の音樂大法要嚴修。

差定　引樂　三寶禮　方便品　壽量品一卷　散華鉢行導　自讚　中樂　對揚　銅堂財團施主の靈名讀上げ　玄題　三版　退樂。

同日午後一時。前同上法要嚴修

午後三時　說教　能仁僧正

同日午後七時。岡崎の市公會堂に於て、本山布教部主催にして國民思想の大講演會開催。

開會の辭　金光孝碩師

我が行く道　中川日吏師

現代思想に對する日蓮聖人の批判　三上義徹師

統一本尊の五大事觀　野口權大僧正

思想問題と日蓮主義　管長

當日午後より少雨あり、稍寒氣を覺ゆれども、大法會に來詣の檀信徒を始め、當地著名の諸氏、京都帝國大學の教員、各學校教師、府市吏員、其他熱誠なる聽衆にして壹千名以上あり、頗る盛會にして思想上有益なること多大なり、午後十時閉會。

十二日晴。勤經　前同上嚴修　直に說教。

法話　富田良逵師

同日午前。前同上大法要嚴修。

同日午後一時。歐洲戰亂病死者の爲追弔、法服長絹正裝にして管長本多大僧正導師となり（滿山の大衆を引連れ音樂法要にして壯嚴なる大法會嚴修。式了て

御親教　管長本多大僧正猊下

信仰を增進すべき御法談にして一般檀信徒法悅に浴し聽衆六百名以上なり。

同日夜。本山講堂に於て本山布教部主催大講演

帝國の使命と日蓮主義　吉永日洋師

精神文明と日蓮主義　三上義徹師

法華行者の歸喜　管長本多大僧正猊下

當日天氣清朗暖和にして聽衆七百名以上に及び何れも熱心に聽講す。

十三日朝。勤經　引續き說教。

法話　上田智量師

同日午前。野口權大僧正大導師の下に、宗門功勞者祖先靈　大法要嚴修。

同日午後。野口權大僧正大導師にて、總施餓鬼音樂入大法要修行。

同日夜。本山講堂に於て、同布教部主催大講演會開催

法華行者の訓練　矢野聖顧師

知法思國　京藤義應師

大國民の信念及理想　野老乾一師

宗教的日本　熊井本光師

閉會の辭　萩原僧正

熱誠なる聽衆にして前夜以上の盛會なり。

右前後三日間大法要に對し、各地檀信徒本山來詣講を創立して、團隊來詣年々隆盛に向い、宗運旭日の東天に昇るが如し。式了て慰勞會を開き萩原本山部長登山僧侶の所感ありて、萬歲を三唱し解散す。

四月布教通信

○本山及護正會同志會の布教師は萩原部長金光師、外○十一日より十三日に至る大法會中、布教は朝午後夜等にして松會堂に於ては

開會の辭　金光孝碩

我が行ふ道　中川日吏

統一の五大事觀　野口權大僧正

思想問題と日蓮　管長猊下

○十二日より能仁僧正國友日斌師を始とし石川師三上義徹師等の豪將、外吉永、富田、熊井、野老、京藤、矢野師等の英後の布教師導出馬。

○天晴會には野口權大僧正の出席。

○鐘淵紡績會社の布教は三好等なり。

○外に萩原部長金光師は山間僻地の丹波知見本妙寺日經上人の三百遠忌の布教あり。

●千葉縣下國民思想巡回講演

（監督布教師能仁僧正の一行）

管長猊下

第七教區聯合にて講演を開催す、能仁僧正は文學士佐藤重賢師を隨へ午前九時二十分東金驛着、玆に於てか野澤少將の一行と相合し成鳥、土屋の兩氏東道にて自働車に乘じ白里海頭第一と稱せらるゝ片貝館に向ふ、而して午後一時より土屋布教師（眞容）の開會の辭に次ぎ、

四恩報謝　佐藤文學士

東西文明の調和　陸軍少將　野澤悌吾

國民的宗教の訓練　能仁僧正

の有益なる講演あり聽衆四百餘名、同日出席の重なるものは、片貝町風會長古川豐三郎、高柳定吉、月村啓藏諸氏並に區內僧員大橫、亀崎、鵜澤等の十數氏、午後六時半一同に別れ講師の一行は又自働車にて『東金公會堂』に向ふ、午後七時よりの講演は、統一團支部、尙風會、第八教區の聯合開催にて、既に公會堂に到るや、山岡僧正、廣森、片岡、竹內管事等出席せられて一行を迎へ、少憩の後、金坂布教師の開會に次で、

法華經と大日本　佐藤文學士

日本文明の價値　野澤少將

思想問題の解決　能仁僧正

東金、片貝、聽衆相均しく何れも多大の感動を與え將軍の英姿は更に人目を新にするものありたり、而して

▲四月七日、山武郡『片貝公會堂』に於て、統一團支部

○十一日より十三日に至る大法會中、布教は朝午後夜等にして松會堂に於ては

開會の辭　金光孝碩

我が行ふ道　中川日吏

統一の五大事觀　野口權大僧正

思想問題と日蓮　管長猊下

○十二日より能仁僧正國友日斌師を始とし石川師三上義徹師等の豪將、外吉永、富田、熊井、野老、京藤、矢野師等の英後の布教師導出馬。

○天晴會には野口權大僧正の出席。

○鐘淵紡績會社の布教は三好等なり。

○外に萩原部長金光師は山間僻地の丹波知見本妙寺日經上人の三百遠忌の布教あり。

●千葉縣下國民思想巡回講演

（監督布教師能仁僧正の一行）

管長猊下

第七教區聯合にて講演を開催す、能仁僧正は文學士佐藤重賢師を隨へ午前九時二十分東金驛着、玆に於てか野澤少將の一行と相合し成鳥、土屋の兩氏東道にて自働車に乘じ白里海頭第一と稱せらるゝ片貝館に向ふ、而して午後一時より土屋布教師（眞容）の開會の辭に次ぎ、

四恩報謝　佐藤文學士

東西文明の調和　陸軍少將　野澤悌吾

國民的宗教の訓練　能仁僧正

の有益なる講演あり聽衆四百餘名、同日出席の重なるものは、片貝町風會長古川豐三郎、高柳定吉、月村啓藏諸氏並に區內僧員大橫、亀崎、鵜澤等の十數氏、午後六時半一同に別れ講師の一行は又自働車にて『東金公會堂』に向ふ、午後七時よりの講演は、統一團支部、尙風會、第八教區の聯合開催にて、既に公會堂に到るや、山岡僧正、廣森、片岡、竹內管事等出席せられて一行を迎へ、少憩の後、金坂布教師の開會に次で、

法華經と大日本　佐藤文學士

日本文明の價値　野澤少將

思想問題の解決　能仁僧正

東金、片貝、聽衆相均しく何れも多大の感動を與え將軍の英姿は更に人目を新にするものありたり、而して

のと共に秀でゝ見える。

○鶏肥えて病む者もなし蓼の秋　萩村芳夫

○友訪へば唖の留守居や蓼の秋　阿村

○蓼畑の隣り大根の花白し　曉花

○蓼の秋かなりやだけが啼いて居る　大阪長尾直水

○史に殘る古武士の塚や蓼畑　かね女

○戸をしめて犬の畫寢や蓼の秋　王山

▲蓼秋や小村十戸の五十人

○動くと云ふに就て

▲印生

某君から「動く」といふに就ての御質問、甚だ失禮ですが、幸ひ本月應募の句を拜借致します。『風に寢て蓼蟲踏るゝ逗かな』佳い句です、しかし蓼が稻であつたら一層佳いやうに感じます。果して然らば之を動くといふのです。又一例『風に乘る涙のうねりや蓼畑』之も佳い句です、しかし之を『風に乘る涙のうねりて稻田かな』と假りに考へたとして此の方が若し佳いとしたら之も動くといひます。

▲大阪の茶山君に、どうか引續き御投句を祈ります。

▲選の標準に就ての御尋に對しては次號に

次號譯題『夕顏』『靑田』

○發考○七月　新涼（秋季）。走馬燈○八月　鬼灯（ほゝづき）。蟋蟀○九月　無花果（いちゞく）。梨○十月　湯婆（たんぽ）。枯蓮○十一月　風呂吹。水潦（みづばな）○十二月　枯野。鷦鷯（みさゝぎ）

○名殘り櫻の句會

（第二回嵐響會の記）

王山堂

近きうちに常檢寺墓地を雜司ケ谷の本教寺に移轉することとなり、從つて句聖嵐響翁夫妻の墓も本教寺に移すことゝなりぬ。翁の墓と共にあるなる嵐響櫻も切り拂はるると云ふ。此櫻の大幹は數年前朽ちてひき切り殘り支幹一本となりて庵の家根を覆ひ、昨年までは美しく咲きたりしが本年は枝一本は朽ち他の枝も弱めきければ花も如何にやと案じたるまゝにて過ぎぬ。此櫻の蕾は八重なり、大なるは直徑一寸三四分にて少くも十五六蕾多きは三十蕾以上のものつきたるあり、白に少しばかりあかね色ほんのりと有るか無きかにて運咲きなり。翁の好みに應はしく偲ばる。

二十五日の事なりき、子供等家根に上りて櫻の枝を折りて瓶に挿しはさみ曰ふやう、四方の櫻またく散り果てゝ葉櫻となれる中に此の一枝のみ葉と共に花の盛りて美し、これも一兩日の中には散り果てなんと見しかば父上を慰ぐさめんとて折り來れりといふ。予今年何にかと忙しくて此の櫻の咲けるさへ氣附かざりき、雜誌の編輯に從ふ緣にて此處に住ひ、はしなくも翁の墓を發見し奇遇の感深かりしに、疊には句友を集め二百十年の句會を催して經をも手向けたるも因緣ならめ、今年は墓の移轉にて切はらはるべく、切り拂はれざるも老木の命數盡きて枯死するは來年をも待つまじきに、木心ありて最後の裝ひとや思ひけん、斯く美しく咲きたるも殊勝にて亦哀れ深し、いで其花見んと戸を出んとすれば、子供は父よ止め給へ、今年は花少き上に既に散り果て、只日蔭の此一枝のみかばかり咲きおごりて殘り居たるなり、戸を出て給ふにも及ばず、此處にて眺め給へと云ふ此言葉にて尙更にうら悲しき心催ふして這は翁が櫻もて何事かを我れに語り告げ給ふにも惟はれぬ。此儘獨り眺めても今年限りの花と思へば殘りおしき限りなり、いで句友集めて句など吟ぜんものと、葉書數葉を飛ばして「はちす會」其他二三の句友に檄しぬ　是れ四月二十五日の事なりき。

講師は西福寺に一泊、翌八日關係者諸氏に見送られ、野澤少將は東京に、能仁僧正は本納に、能仁僧正の一行本納驛に到るや、蓮福寺檀家總代人、布教團、信徒等は歡迎旗を押立てゝ、出迎へられ同寺着午後一時よりは能仁僧正大導師にて、荻生徂徠の追善、並に鳥居はつ女等修繕の涅槃の廻向を區内僧員一同と嚴修し、井口師の開會の辭に次ぎ、

奉祝釋尊の御降誕　土屋賢生師
現代思想と日蓮主義　成島日衛師

本日は俗に本城山の祭と稱し地方に於ける春時の安息日なれば、櫻花の滿開を幸ひに四方より男女の朔集甚しく、堂上堂下佇立拜聽するもの殆ど六百盛況なりき、▲午後六時よりは大綱町蓮昭寺に向ふ、御書鑽仰會、大綱婦人會、區内僧員等の出迎を受け、午後七時より同町

『大正館』に於て、土屋(賢生)布教師の開會の辭に次ぎ、

國家と宗教　成島日衛師
國民的氣風の發揮　能仁事一僧正

の講演あり午後十一時半閉開、翌九日は田邊管事、堂、渡邊布教師、米倉管事等の出迎を受け土氣町琴常高等小學校に向ふ、午後一時より渡邊布教師の開會に次ぎ

日蓮上人と現代　成島日衛師
思想上の大準備　能仁僧正

當校も聽衆三百餘、僧正の講演は到處多大の歡迎を以て迎へられ國民思想統一上深大の効果を與えたり(隨員)

●統一團月報

四月六日　釋尊降誕會　前號掲載
七日　晴
釋迦中心の佛教　松尾鼓城
釋迦降誕の大事　木村日保

當日は豫定外に秋山乾英師「ルンビニ園の叫び」を臨時さる。

講演八日　晴
本尊の本体と其形式　高木木順
釋尊の出家　木村義明
信佛概論　森川日修
釋尊御降誕會を慶讃せる三日間の大講演會は無滯結了。善男善女が佛像に汲んで灌ぎし甘露の茶湯には今猶不變の法味滲りて、感恩隨喜の至情は見思の惑も消滅せるは有難かりき。

十三日　晴　日曜講演
寡默　妹尾義郎
デモクラシーと佛教と國體　松尾鼓城
新思想に對する吾人の態度　井村日成

聽衆約六百余名

同夜、日蓮主義青年會法華經講義　本郷二丁目加藤寅五郎氏宅開催
正道會例會　妹尾義郎
信仰の權威　高木本順
釋尊と日蓮　野澤少將
王佛冥合　松尾鼓城
十六日、地明會例會、本多稅下巡錫中にて野澤少將閣下代講せらる。
十九日(土曜)午後七時ヨリ清明會例會、本多日生稅下の大藏經要義、那先比丘經始講。
廿日　快晴　日曜講演　高木木順
教濟の主力　森川日修
遊戯的信仰の害　青村
聖調要義　本多日生

聽衆七百餘午後二時より四時迄講妙會例會
同日　同夜　青年會法華經講義例會
廿三日　午後七時より信仰爭議會を圓上に開く會者十餘名會長野澤少將閣下を圍んで討論あり感想談あり、熱信の燈室を照し清興また漂ひて利益多大。
廿六日　土曜日、清明會例會、
廿七日　晴、日曜日
開宗會記念大法要大講演會を開く。午後一時より本多日生稅下大師導の下に一會の僧俗虔々で開宗の聖

明る二十六日は土曜日なり。檄に應じて集る人々は木村白蘋、西澤明花、窪田鐵橋の三氏かれ女我等の外に高山氏あり、題は春夏の二季心の隨に手向けらる。(青村、沿地、芳子の諸氏は句を送り越さる)

暖や野路行く人顏赤し　かね女
暖や垣に羽織の懸であり　同
落花數いて墓前に泣く後寮哉　鐵橋
杯盤淚藉只花の盛りかな　同
五右衛門も櫻の下にむすび哉　王山
山男五人出たり京の春　同
廢れたる嵐雪寺や櫻散る　白蘋
嵐雪や幾春秋の花の影　同
榮の花や安土の城趾こんもりと　青村
古酒うまし若草山の月おぼろ　同
沈默の君の心も豔かな　明花
野遊の技にかつぎし弁當かな　同
餌をあさる子鶏ひよこ〳〵爾しめる　かね女
木刀のいざる孫ありて端午哉　同
井の蓋の節穴のぞく蛙哉　鐵橋
白粉の鉢や金魚の赤と黑　同
瓜割つて姉妹も笑ひけり　王山
電燈に白紙さげて春の雨　同
鮮路山春月寒し杉木立　青村
傘に花瀑たゝみ込む吉野山　同
今日を限り墓前の花下の句會哉　明花
阿伽の水に花散るも今年限り哉　同
一天は花榮の香なり小女行　王山
此男鐵の皮なり花盛り　同
花吹雪あびながら筏流しけり　同
下方に香魚の香あり釣瓶舘　青村
墓移す嵐雪櫻いかにせん　同
庵主悠然欣然花を惜む哉　沿地
明け易き夜や短檠の灯のゆらぎ　鐵橋
雄鶏コ、と雌鶏呼ぶなり落椿　芳子
　　青村

日を慶讃し奉り、式了つて直ちに講演に移る。

法華要鈔大觀　木村日保
聖調要義(報恩鈔始講)　本多日生

「靈壇の法燈縛々と輝きて無明長夜の闇を照し炷香しめやかに漂へば當林の蓮華も自ら咲き出でんず。御講演も身に泌みて有難さ言ふばかりなく會衆堂に溢れて盛況を極む。尙當日は施本として佐藤中將閣下遠、大日本國と日蓮聖人」及び御供物を頒興せり。因に當日志納の芳名は左項の如し。

鐘數一ツ　中澤平五郎君

●日蓮主義日曜學校(子供會)

既にあるべくして未だなかりし日曜學校は統一團所屬日蓮主義青年會主催となり開宗の聖日を卜して拔に開校せり妹尾義郎君同校の主意を述べ篤志家また之を賛助して壇々基金の申出でありしは多謝、

一金拾五圓也　安川繁種君
一金拾圓也　久保田雅己君
一金拾圓也　野澤悌治君
一金三圓也　石渡しげ君
一金貳圓也　中澤平五郎君
一金壹圓也　田邊萬治君
一金壹圓也　松下マサ君
一金五圓也　內海穎二君
一金拾圓也　大久保チサ君
一金五圓也　水野三太君
一金拾圓也　山田英二君
一金貳圓也　小川吉男君

聖今年日曜日午前九時より十一時まで當團に於て開校す。日蓮主義的信育の必要なるは言を要せず、諸彦に合掌して至大の御賛助御指導を乞ふ。

●同日午後講妙會例會

夜青年會法華經講義

●法明寺　廿八日、午後七時より清明會設立一週記念大講演會を開く。

開會の辭　宮原六郎
所感　關直彦
佛と凡夫　小林一郎
王法と佛法の冥合　本多日生
伊豆の法難(薩摩琵琶)　山口春水
聽衆七日餘大盛會なりき。　(妹尾報)

●身讀會第四周年會

身讀會は四月三十日午込の同會事務所に開く、會員諸氏の所感に亞ぎ、主任講師松尾鼓城本誌主任は一場の講演を了りたるが、記念墓等を配り卒出度散會せり。

●三菱造船所講演

當地日蓮主義青年會は、毎月二回研究會を開き、熊井本光師の重書の講義を請ひ殊に三月は本多大僧正の御下神を得て湊川警察署々員に結神調話を、鷹取鐵道院工場及び三菱造船所の講演を請ひたるが、去る四月十五日もまた本多大僧正御下神あり、三菱造船所職工の爲め第二回の精神講話を得たり、同日は職工約一萬人を二分して其半數は午後零時半より、後の半數は四時より、能仁僧正の前講に次で、猊下の懇切なる御調話あり、所長始め所員、職工皆等しく歡喜の情その面に溢れ、非常なる滿足を得たり、殊に今回數千の職工がよく其靜肅を保ち、講演の一言一句も聽き漏らさじと傾聽せる熱誠なる狀態は、第一回に比し著しく目立ちたり、以て如何に其効果の甚大なるかを想像し得べし。

●家庭慰安會

日蓮主義青年會社會部主催にて四月十六日午後六時より三宮カフエーオリエント樓上に開催し。

開會の辭　牧忠馬氏
一、君が代　來會者合唱
二、教化講談義十問重次郎霧の別れ　小天長天堂花南陵君
三、奇術

花散つて後繼の子種覺東な　王山
春宵電燈の下、牡丹咲きの嵐雪櫻の一枝は青磁經筒形の花器に崩れんとして挿され、花蕾の上には事もなきに片々と瓣の散りける。其の櫻の下に之等の句は予と鐵橋氏と代り合ひて讀吟して捧げぬ嵐雪翁の靈、この再びあるべからざる時機に、此の志のある人を得て蕊層として笑み給ふべう覺えぬるもうれし。

餘興として盲ら合せの句を儲す、高野冬江氏、聖學等外に子供等四人も加はりて大小合せ十二人笑ひ興じて開卷す、又持ち寄りの豆腐のでんがくはじけ豆、筍、蕗根などの幕の內にて腹を作り、心ゆくまで清興して九時前散じね。

四、教化ばなし(お慈悲)　熊井本光師
五、傳演劇　和田神水君
六、曲藝　五十鈴川九華君
七、舞踊(喜撰、春雨、等)　小西春雨門弟
　　壽藤松江子　伊原すゞ子　小竹君子
　　小西たま子

の順序にて來會者六百有餘、みなアゴをはづさんばかりに笑ひ悅び、十一時散會せるが尙今後も時々開催の計畫なり。

●靈山寺住職榮轉

名古屋市中區古渡町靈山寺住職有田宏道師は五ケ年間中京日蓮主義の爲に偉勳し且つ兒童教養に努力する所ありしが、今回京都總本山妙滿寺內成就院に榮轉することゝなり四月、廿二日午前七時五分名古屋發にて赴任せらるゝ由(名古屋新聞所載)

●有田宏道師の晋山式と清水師の送別宴

有田師は廿二日京都成就院に於て晋山式を擧ぐ、萩原本山部長、坪永管事、金光、銀井、清水、三好、熊井大原師等の來臨ありて嚴莊なる擧式あり。式後清水師の送別と、有田師の歡迎を兼て宴を開く。先づ清水師立て五ケ年間の奮闘を語り、此間大綱なかりしは各位

擁護の賜なりと感謝の意を述べられ。次に有田師は未だ修養足らざる不肖の身を以て、此活舞臺に赴任せしは、自己を顧みざるの甚しきものなれども、幸に信念の閃くあり、日蓮主義を根底としたる予の犠牲獻身の精神が各位奮闘の上に一助ともならば望外の悦びなりと述べ、次に金光師、萩原本山部長は交々立て、清水師の金鵄行を旺んにし、更に有田師の前途を祝福し、千萬人と雖も吾行かんの意氣を以て、大に奮闘せよと戒諭する所あり、富永師、別所、木田、大橋、山田諸氏等の斡旋盡力に依りて頗る盛況を呈したり。

●清水一乘師晋山式 名古屋市靈山寺に榮轉されたる清水師は三月廿三日七條驛發にて名古屋驛に着前住有田師、惣代大日廨家、田原、大矢、櫻井、奥村等教區として國友管正、長谷川管事、草切、武藤師等の歓迎に依り、直に十數の寶車連々入寺、莊嚴なる晋山式擧行、終了後宴に移り、清水一乘師は丁寧な挨拶をなし、次に先住有田師起立所感を述べられ、各地よりの祝電を受く、午後五時寺檀和合の中に散會せり。

●愛知縣活動教報 刈谷町長遠寺住職武藤照惠師は、沈默寡言の人にして孜々倦まず布教に努力されつゝあるが、本年は開基日蓮上人の二百五十遠忌に相當するを以て、長谷川管事、有田、草切、栗田師等組寺檀衆全部を招聘し、管正國友日斌師等の下に、莊嚴なる法要を嚴修し了つて講演に移り、有田師國家と宗教と題し一時間師一流の熱辯を揮ひ、次に國友文學士は、釋尊中心の佛教なる題下に二時間に亘りて、舌端火を發し滿堂聽衆の肺腑に徹せり、著し刈谷に於ける空前の盛況なりき、長谷川師の諷誦文左の如し。

諷誦文一章

勸請(中略)夫れ惟れは、一乘妙法の華は香馥都として日本國民の心田に薫じ、顯本遠壽の月は光り明々として大正の照代に朗かなり。柳々當寺は、蓍記を案ずるに、當刈谷築城の際は、微々たる一小庵にして、譬如坊と稱す、時の住僧日信迂化の後、久しく庵室のみにして住僧なし、其後萬治元年越境寺第十世寶松院日慶上人は、稲垣信濃守の一門、西尾小左衛門殿、則ち華光院殿の歸依淺からず、若干の領地を賜はり一寺と爲す、上人は不惜身命の大導師常樂院日經上人五弟子、京都六條續に創取の慟刑に處せられたる一人長遠院日顧上人の弟子たるを以て、師恩報謝の爲め自身の院號と併稱して寶松山長遠寺と號とす癸、寛六師の院號とを併稱して寶松山長遠寺と號とす癸、寛六十一年三月九日を以て轉化し給ふ、則ち今を去る二百五十年前なり。爾來幾星霜を經て、寛政三年八月關東中國大暴風雨の爲、堂宇悉皆全倒するの慟狀と羅りしが、明治四十三年現住武藤照惠師が、檀家總代人大野介莊、松原常之丞、稲垣彌平氏等と協力し、外諸氏の援助を以て、本堂を再建し以て莊嚴善惡を極め、本日を卜し寶松院日慶上人並に大擅那華光院殿の二百五十遠忌を勤修す、著本寺曾正日城上人を屈招して唱導師とし、區内各寺院、並に當字各宗寺院當山信徒其他參列の善男女法雨に浴し、隨喜讚歎せり。是れ偏に佛祖の威德と寺檀協力の致す所なり。時萬衆の櫻花爛漫として、檜には一乘の果を結び、前には流水堪へて本覺顯正の月浮ひ、無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もなし、大衆は勤喜饒益し、新たなる信念を喚起せり。仰き願くば、正法興立、益道繁榮、萬民快樂、各信心培增、道念堅固、現當二世、所願成辦ならしめ給へ、重て一天四海普歸妙法、平等利益　仍諷論文一章如件

維時大正八年四月六日

第十三教區管事　長谷川日清　敬白

●東北巡教 莊川日堂曾正は過般東北布教を致されたるがその景況を聞くに、四月七日書は米澤市外廻金寶寺にて講演、宮代向政師は善知識の意義にて莊川日堂師は信行上より見たる思想と行爲の題下にて

信仰の眞對衆にて、莊川日堂師は人格向上の道を講演。

四月九日書は二本松町蓮華寺に開會、鎌倉時代と大正の今日及び文明の眞意義を何れも莊川師講演さる。

●備前通信 四月十五日は和氣本成寺婦人會十六日同信會、十七日は草生久成寺にて(宗教の五倫)、夜は(本尊の眞義)。二十日は天瀬の角須波廣吉氏方にて。二十五日は河口初遣方にて。二十六日は長谷川橋太方にて何れも原田日勇師懇切布教せられたり。

●三重縣通信 四月六日統一團四日市分團にては同市諏訪公園内圖書館において陸軍中佐堤靜寛君を聘して講演會を催したり、演題は「現下の急務は國民の覺醒に在り」而してその要旨としては、露國動亂の原因、獨逸敗戰の原因、英米參戰の理由を述べ最後に戰後に處する日本帝國の進路を論ぜられたり、當日は山路氏父子、並に池上、林、中川、服部、佐藤、松井等の役員諸氏幹旋盡力の効あり聽衆は學生多く大拍手大觀迎を更けたり。

●大阪堂閣寺教報 四月七日は三宅方、九日は相馬宅何れも京藤義應師出演、津田氏參加○十五日は春季大會を堂明寺に開く、京藤師は開會の辭を、橋山惠正師は日蓮佛教に就て」を、矢野馬和尚「動物愛護」を三上義徹師は「右か左か」を、當日は折惡しく雨天なりしも盛會なり○廿一日婦人會開會、京藤、上田兩師出演。因に上田師は先月より法華經講義を經講され居れり。

●豐橋通信 妙圓寺にては四月九日正午大法會を營み、尋で增田師前說にて野口權大曾正の說教あり。夜は豐田師は「我等が信仰を、草切師は「頑鈍五能不成一枝」を、野口權大曾正は「日蓮上人より煩惱五欲を講演さる○十日は正午管樂大法會並に野口貌下の說教。

●豐橋の思想大講演會 十日夜武德殿において開會滿井文學士開會の辭を述べ、次に野口曾正は「現代思想と國民の悟覺」を、次に本多貌下は「東西文明の大觀」を述べられり、聽衆想無慮一千以上、屋外に立聽く者も多數見受けたり

●各古屋教報 四月八日常德寺に思想講演會を開き智識階級の聽衆多く功果甚大なりしと、信仰の要義を有田宏道師、思想問題の解決權を三上義徹師述ぶ○四月九日同市寶山寺に開會、三上師出演さる。

●靜岡縣 四月十七日、遠州見付町磐田座に思想大講演會を開催聽衆滿堂、同町未曾有の盛會を極む、宗教法の活動に就て大杉町長、新思想と日蓮主義を三上義徹師、國民生活と日蓮主義を小林一郎氏述ぶ○四月十八日靜岡市晴明會に開會、三上師出演

●神奈川縣 四月六日横濱市佛教公會堂に開講、同廿三日横濱伊勢崎町福井屋に開會、廿六日横濱長壽軒に開會、何れも三上義徹師獅子吼さる。

●津山教信 美作津山活動史四月中に於ける報道左の如し。二日上之町顯本法ケ宗布教所に於て、本門戒壇建立の目的を。七日同、本門戒壇の名義及原意を十二日同、本門戒壇の典據を。二十二日同、本門戒壇の實賞を。二十七日同、本門戒壇の根本教義を何れも龍仁一十師演ぜらる。又八日は英田郡林野町に於て日蓮主義講演會を○。又二十八日苦田郡高野村山西、牧安治郎氏の改宗式及發表紀念講演會を開會の辭を山本勤一氏信後の生活を龍仁一十師演ぜらる。

●臺灣開教 臺灣に於ける佛教は矢張り淨土、眞宗の天下なるが、村上乾淨師は臺中を中心として顯本の光輝を耀さん意氣にて、松鶴氏は將來一家の資産を擲げて寺院建立の志願あり、村上師も此に新生活に蘇生して法圖の爲め一期の事業として之に從事するの考なりと四月八日は臺中の布教前に佛祖の御降誕會を行ひ、松鶴氏は唯一聖者、村上師は現身佛の題下にて講演を行ひたりと云ふ。因に松鶴氏は製藥業者にして成功者なりと。

◉五島通信 長崎縣南松浦郡慶林寺住職增田智融師は昨年來有川より海上十三里を隔つる字久島平村の教會所を千葉縣九重村妙蓮寺(妙法尼御前開基弘安四年十月創立)を移轉することに決定の由。

▲平田文晋氏と日蓮主義　曾て五島教況中に報道せし同氏は近來我主義の人となり三月二十日有川本町小坂定次氏宅に於て講演會開催良卯三治氏の宗綱捧讀平田氏は入院の告白あり、氏は元來淨土宗なりしが我國體の眞髓と日蓮主義との冥合に崇敬讃仰したる結果を告げて聽者を感動せしめたり。增田師は『日本國體と日蓮主義』の題下に熱辯、聽者は登記所、役場、郵便局員、小學教員其他有力なる地方人士並に各宗宗教家にして深く感動を與へたり尋で四月六日平田氏の起誓平田又六氏の起誓ある等同地の氣風察すべし、平田氏は同村の村長にして素封家なれば好影響なりといふ。

◎十八日、東金町支部講演所に於て、聽衆四十餘、日蓮主義と家庭を、土屋賢生。信仰の要義を、山岡日紹の二師◎十二日、大網町宗典講究所に於て、『御書講』

郵便局長岩佐氏並に子安、石井氏等諸氏熱心に盡力しつゝあれば漸々鞏固なる團結を見るに至るべし。

▲第七教區教報 ○四月十一日、今泉等覺寺に於て布教開會、松永山主大橋師、土屋布教師等講演する。○十三日　北幸谷善導寺に於て開會、鎌織山主、鶴崎日憲、土屋眞容師等出演。○十五日　西野善立寺にて開會、鈴木山主、廣部、栗原、土屋の諸師出演。○十七日　前の内常覺寺に開會、矢田山主、栗原、土屋の諸師出演。○十九日　小沼田要本寺に於て開會、栗原山主、松永、土屋の諸師出演。○廿八日　御門妙善寺に於て小竹山主講習會後、小竹山主講習會後流行感冒に病みしも全快せしを以て、開宗及什祖御降誕の紀念日を卜し顯本教會開催、先づ一同報恩の終法後、小竹山主は祖開の大慈悲の題下に熱辯、法悅を與へたり。

▲片見修養講演會 四月十五日妙覺寺に於て開會、區長植草理雄、前衆議院議員武田健三郎、山武郡視學片岡小五郎、片見村長古川藏三郎、鳴瀬村長吉田誠夫の諸氏出演され、大橋日憲師は法華經の根本義の題下に講演されたり。當日參會者八十餘名同寺に於ては未曾有の事なりき。漸次發展の見込ありといふ。

▲七區教布教會 四月廿一日片見妙覺寺に開會、管事布教員其他各寺院住職集會盛會なり、布教師土屋眞容、松永會終、大橋日憲、小竹管事三師の外に二名出演されたり。

▲第三教區青年布教團 三月十四日　藤原道路布教團催出演講士は山田、竹内、長岡、河野、宇津木の五名主職宣傳す。四月九日　藤原道路布教團催す出席講士は山本、竹内、山田の三師熱辯滔々大に勞む。

△宮谷本國寺 四月十三日春季布教並に朝日講開講を執行す。當日人員を引きたるは、大網濱宿の講員

○雜報報告に就て

片貝通信とだけ表書きされて、文中『當山開祖以來』云々とあれど、其發信者も不明、其の當山が何處やら是亦一向不明にて、發信者の方では御得心でも當方では解らず、止むなく『沒』としました此通信には限らず、通信の中に此類のものは可なり沢山ありまして困ることがあります。兎に角、雜報々告の要件としては、時日、場所、これは何としても必要のものでありますから御注意致します。

編輯部

●千葉縣通信

▲山武統一團教況 ◎四月十日豐成村小學校、聽衆二百餘(青年會)開會、開會の辭を市川校長。思想問題に就て成島日衛。道德と宗教を竹内無着の諸師演ず◎十二日、正氣村家德、野老常吉方、聽衆四十受持信行を金坂乾受。本佛の大慈を竹内無着二師演ず◎十三日、東金町大豆谷、川島ふじ女方、聽衆三十、信仰と靈感を片岡盛助。本化の大教を金坂乾受師演ず◎十三日、蓮沼村中根、小川安右衛門方に於て、聽衆百六十餘修養の目的を成島日衛、立正治國を竹内無着の二師◎翌十四日、同村小學校に於て、補習校生徒等約二百名、開會を鶴岡校長。修養の第一義を成島日衛師

一同は、題旗を高く薫風に飜へし、赤の揃の手拭にて靈拜、其儘は思ひ〳〵の題旗を押し立てつゝ、唱題の聲いと勇ましく本堂前に集ひ來る。驚店十五六、午前十時山主土屋布教師は田邊管事外數名の各寺諸師と法要嚴修。午後一時より「自覺」北田信昌、「風教」栗原顧有、「正法治國」土屋布教師の說教あり。諸師の熱辯は聽衆に感動を與へられたり。晝間聽衆約六百五十名。午後七時より講演、「日蓮主義の本領」北田信昌、「道德の根底」、栗原顧有、「日蓮主義理想」土屋布教師、夜間の聽衆約八百名の善男善女さしもの大本堂に溢れ、殊に始終靜聽せられしは感服の外なかりき。因に高橋嘉右衛門夜間の講演中用辨の爲餘途に就かんとしたるに他より異口同音に是の講演中師へるとは遺憾ならずやと制せられたるに見るも、謹聽を說するに足らん。因に板倉智勇、岩佐定五郎、富田藤吉、櫻井音松、高橋嘉右衛門、加藤治右衛門、鈴木甚右衛門等世話係り諸氏の遺漏なく萬事に盡瘁せられたるを多謝す。

▲三上師の布教　四月二十八日夜同町片岡呉服店に開演、原田居士、三上義徹師出演、四月二十八日主教開宗の聖日なるを以て、上總東金町鳩ケ峯に旭日唱題會を行ふ異口同音に力唱するもの千餘名に及ぶ、力唱に對する挨拶を三上義徹師述ぶ。二十九日午後東金町在小關妙覺寺に開演。横山會章、三上の二師出演三十日夜　大網町小川時計店に開演、栗原顧有、三上の二師出演。五月一日　午後千葉縣巡賞教習所に講話三上師は新思想に對する批判及歸趨を論ず。同日夜千葉町片岡呉服店に於て營業を休みて公開演說會を催ふす信仰と學一の譽(統一節)を千代木鶴城、眞劍なる日蓮主義の信仰を三上師出演す。

▲片貝布教　廿九日戸村敬造家にて布教開演、辯士は横山會章、三上義徹の二師なりき。

●統一閣とオルガン　矢野茂氏末女故直子遺愛のオルガンは報恩供養益に記念として統一閣に寄贈されたり。

●石塚日緣師遷化

師は第十二教區野田村前法華寺住職として同寺住職中本堂を改造し、明治二十六年斷欲生信錄を上梓して廣く宗門後學の資糧に供す等の功あり。老て益々鍛鍊壯者を凌ぎしも、明治四十四年當時住職寺太田妙安寺を徒弟松本堅晴氏に讓りて法華寺隱棲に入り、本年三月末病床に臥し四月三日遷化せらる。享年八十又三、本葬は同六日同本櫨僧正導師の下に近縣僧侶會する者十數名非常の盛儀なりしと。

●久富勘太郎氏の逝去

東京組合辯護士にして溫厚篤實人格の人として知られたる故久富勘太郎氏は、岐阜縣本巢郡土實村字屋井久富太吉氏の長男にして慶應二年に生る。明治十七年岐阜中學卒業、郷里の小學校に教鞭を取る事三ケ年及ぶ、明治二十年笈を負ひて上京、大藏次官鄕純藏氏に賴る、曉星學校より轉じて中央大學前身法學院に至りて卒業、直ちに辨護士試驗に及第す、即ち明治九年にして「爾今今日に至れるなり。本年三月十一日心臟病の爲に逝去さる。氏は十二三年前本多貶下の講話を松本鄕太郎氏の妙典研究會に參會したる以來厚く貶下に歸依し改宗して今日に及び一家悉く日蓮主義に鑽仰されたり。葬儀は同月十一日統一閣に於て擧行、木多大僧正綬下導師として衆僧を率ひ嚴肅に營まれたり。弔辭は中央大學々員會理事長法學博士花井卓藏氏、東京辨護士會長小川平吉氏、日本辨護士協會、天晴會幹事神田協和會、元佐久間町一心會(故人は此會長たりし)地明會幹事相互共濟會等にして盛儀を極めたり。左の吊詞は以て氏の爲人を知るに足らん。

弔詞

本會創立委員久富勘太郎君不幸病魔の犯す所となり終に溘焉永眠の客となる。嗚呼哀哉、君資性豪邁聰明雄壯思ふ所遂げざるなく言ふ所必ず爲す、是れ吾人の常に畏敬する所たり、本會設立に當り貢獻せられたること亦甚た大なり、今や事業其緒に就き、信に君の後援を待つこと最も切なるのとき、突然其訃に接す、痛悼何ぞ堪ゆべけんや本日葬儀に列し恭く弔意を表す。

大正八年三月十三日　　相互共濟會

在大阪　山田秀太郎

往年余寓于大阪北野圓頓寺一名萩寺養病之時故舊小洲石塔謙君問病且見寄詩君今也則亡今茲大正八年二月以來余又偶養宿病於大阪西野田寓屋獨凄然轉思古往今來事而不克自禁之時余偶按出君之詩次其韵以騁自遣聞今以之似於鼓城松尾研兄併乞政

昔吾臥病幾旬過今也偶遭憂宿病想起當年一交誼君慰僕覺如醒小洲學德眞堪愛詩作屬文永不磨懷舊之情胸裏湧慘傷在辱獨悲歌

來詩云胡枝寺古少人過此處故人方養病鶴骨龜腸欺鑑老爐煙香案伴維摩文詩半歲雖錢廢金石千秋豈可磨相約圓春花月夜淚揮津上共行歌

▲正誤　前號床次君に贈る詩、恩は思なり

本多日生師著

大藏經要義

◎日蓮主義綱要　菊版洋裝上製　三方金縁函入　毎冊四百頁以上　既刊自一卷至十卷　各冊貳圓四拾錢　送料各十二錢

◎日蓮聖人正傳　本多日生師著　正價壹圓六拾錢　送料八錢

◎日蓮主義の運用　四六版美本　正價壹圓拾錢　送料共

◎日蓮聖人の感激　九拾五錢　送料六錢

◎日蓮主義　修養と日蓮主義　前同　斷

◎國民道德と日蓮主義　前同　斷

◎人と教　壹圓貳拾錢送料八錢

◎法華經の心隨　八拾錢　送料共

碧瑠璃園著

日蓮聖人　四六版九〇〇頁　ポイント型上製　新活字　一冊貳圓八拾錢　郵稅拾貳錢

右取次販賣　東京小石川區白山前町一七　統一編輯所　振替東京三三五三三番

元朝倉改清水一乘

轉任　名古屋市中區古渡町靈山寺住職　清水一葉

最成寺住職吉藏寺兼務住職　吉塚通暎

今回從來の「敬太」を前記に改名仕候

日宗法衣專門

青雲帽　帝教服　袴

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北

振替口座大阪六八四七

定價表ハ御申越次第何時ニテモ御送申ス候

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年六月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿三年「統一」六月號

（第二百九十二號）

勇猛精進……大僧正
日蓮聖人教義綱要……僧正
大日本文明の價値……陸軍少將
大乘觀女子解放論……本多日生
……井村日咸
……野澤悌吾
……松尾皷城
……機微譚語……山根青村
……和歌課題『嶺雲』……清岡長言選
……趣味餘滴……統一俳句
……統一團報……讀者月旦……監督布教其他

▲我帝國の學問獨立の要望

支那學生が日本に留學する。而して我より敎ゆる所は歐米の哲學、乃至歐米科學の受賣である。故に支那學生は日本を取次所として歐米の其れを學ぶのであるから、戀仰する心は偏に歐米にあつて日本にはあらう筈がない。本家に對しては益々憧憬の心を催すだけそれだけ日本を輕蔑するのは當然である。而して日本人は彼に對して恩を施したものと惟ふて居るが奚ぞ計らん輕蔑が過ぎて實は我國を仇敵視するに至つて居る。元來支那人は妄想的に自重心の強い國民である。中華と稱し五千年の文明を看板に誇つて居る國民である。それが近來國內紊亂するに反して日本は隆昌するのである、嫉妬せざらんと欲するも得べけれやである。況や日本の膨脹をやである、その下風に立つをやである。彼國頃日學生之が主として日貨を排して庶衆之に雷同し頗る狂態を呈して居る。其因て起る原由多々あるべしと雖も其一は實に以上の理由に依るのである。是に於て憶ふ、我日本は實に學問の獨立である。日本の哲學乃至日本の科學でなければならぬ。我日本の權威ある學問……哲學、宗教、文學、工業、化學、法律、總て之等が歐米の其れよりも更に超越して獨立的見識を示さねばならぬ必要に迫つて居る。而して其既定の事實としては實に我日本の國體の精神と日蓮主義の精神であらねばならぬ。

▲大日本の國體と日蓮主義

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
●御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商　小野嘉助
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布田眼藥
效能、たゞれ目、かすみ目、ほし目、くもり目、ちゝ目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓、
布田血の藥
定價壹袋、拾錢、貳拾錢
效能、男女ちの道、產前產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絕、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、
千葉縣山武郡源村上布田參百番地
藥王寺
布田眼藥血の藥　本舗　齋藤日章
（御注文は總へて下記振替に）
（振替東京第六七九一番）

●日蓮各宗寺院御僧●
法衣　草木
（直に御聯想下され候儀に候）
京都　草本店
三條通烏丸東入ル町
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●●何も佛佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●●
佛像佛具位牌木鉦調度所
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達
舊名「乾清」事佛師
京都寺町四條南大雲院前
大佛
辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
多少に限らず御用奉願上候也
●●御用御せ被下候はゞ叮嚀親切を旨と致候●●

佛像佛具位牌木鉦大販賣所
宮殿憧幡天蓋其他一式
●各大御本山御用達
御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層勉强仕り莊嚴品一式陳列仕置候
郵稅四錢
定價表ハ御一報次第送呈可仕候
小賣部　京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
長距離電話中貳七八參番
振替口座東京貳〇七壹
大阪四貳五九
卸部　京都市三條通小橋西入
本舗　三法堂藤田總治

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（▲本誌定價一冊十錢郵稅五厘▼）
（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）